

【漢検漢字文化研究奨励賞】佳作

「不」はなぜ「弗」と発音されるのか —上中古中國語の否定詞「不」「弗」の變遷—*

二松学舎大学文学部准教授 戸内 俊介

目次：

- 1 「不」の字音について
- 2 上古中期中國語の「弗」と「不」の機能上の區別
- 3 上古中期の「弗 ≠ 不 + 之」の違反例
- 4 秦代の「弗」
- 5 漢代の「弗」
- 6 「不」はなぜ「弗」の音を持つのか—「訓讀」と「イエスペルセンのサイクル」から
- 7 おわりに

1 「不」の字音について

「不」は『廣韻』では4種の字音が収められている。

下平・尤韻：弗也。又姓。《晉書》有汲郡人不準，盜發六國時魏王冢，得古文竹書，
今之《汲冢記》也。甫鳩切。又甫九、甫救二切。 [甫鳩切]

〔「弗」である。また姓である。『晉書』に汲郡の不準が六國時の魏王の墓を盗掘し、古文竹書を手に入れたとあるが、これが今の『汲冢記』である。甫鳩切。さらに甫九切と甫救切の二切がある〕

上聲・有韻：弗也。《說文》作𠄎，“鳥飛上翔不下來也。從一。一，天也，象形。”又
甫九、甫救二切。 [方久切]

〔「弗」である。『說文』は「𠄎」に作り、「鳥が飛び上がり降りてこないことである。「一」に従う。「一」は天である。象形」とする。さらに甫九切と甫救切の二切がある〕

入聲・物韻：與弗同。又府鳩、方久二切。 [分勿切]

〔「弗」と同じ。さらに府鳩切と方久切の二切がある〕

* 本稿は、「漢語語法化的通與變國際學術研討會暨第十一屆海峽兩岸漢語語法史研討會」(2019年9月6日—9月7日、臺灣師範大學)で口頭発表した論文〈“不”爲什麼會有“弗”的讀音—論上中古“不”和“弗”的演變〉、及び「第46回中國語文法研究會(2020年9月19日、オンライン開催)で口頭発表した論文「「不」はなぜ「弗」と発音されるのか—上中古中國語の否定詞「不」「弗」の變遷—」に基づく。また本研究は、日本學術振興會(JSPS)科學研究費補助金「上古中國語における否定詞體系の通時的研究—出土文字資料を中心に—」(16K16836)、「古代中國語方言の動態的研究」(18K00532)、「シナ=チベット諸語の歴史的展開と言語類型地理論」(18H05219)、二松学舎大學特別研究員制度の成果の一部である。

この 4 音のうち、平聲(甫鳩切)、上聲(方久切)と入聲(分勿切)が正切であり、去聲(甫救切)は又切にしか見られない。その中の上聲の「不」について、丁聲樹は李方桂の説を引用しつつ、

《切韻》的‘不 pjuət’到現在變爲 fau(廣州), fou(北平), 只餘‘然否’、‘否認’一類的用法, 通寫作‘否’。” (丁聲樹 1935: 996)

〔『切韻』の「不」は現在では fau(廣州)、fou(北平)に変わっており、「然否」や「否認」の類の用法に残るのみで、一般的に「否」と書く〕

として、『廣韻』の上聲「不」が現在では「否 fōu」字に変わっていると指摘する。では現代中國語の「不」の字音 bù はどこから来たのか。丁聲樹 1935 によると、一部の現代中國語方言の「不」、例えば廣州の fet や、北平(北京)の pu(すなわち普通話の bù)はいずれも、『切韻』や『廣韻』の pjuət(「弗」、すなわち入聲の「不」)に由来するものであるという。丁聲樹 1935 はこの点について、李方桂氏の以下の觀點を引く。

大概在很早的時期, ‘弗’ pjuət 已有兩種讀法: 一種是重讀(accented), 保持 pjuət 音, 後來變爲 fet(廣州), fu(北平)等方言讀書時用; 還有一種是輕讀(unaccented), 因爲輕讀之故, 就把微細的介音-i先失去了, 作 puət; 失去了介音-i-, 所以重唇後不變爲輕唇, 廣州 pet, 北平作 pu, 許多官話方言就用這個字作普遍的否定詞, 不過把它寫作‘不’字。 (丁聲樹 1935: 996)

〔おそらく早い時期に、「弗」 pjuət には 2 種の読み方があったはずである。1 つは重讀のもので、pjuət の音を保ちつつ、のちに fet(廣州)や fu(北平)などの方言で讀書時に用いる音に變化した。もう 1 つは輕讀のもので、輕讀ゆえに、まず弱い介音-i-を失って puət となった。さらに介音-i-を失ったため、重唇音は後に輕唇音に變化せず、廣州で pet、北平で pu となった。多くの官話方言はこの字を普通否定詞として用いているが、それを(文字としては)「不」で表記している〕

梅祖麟 2013: 1-2 によると、廣州や北京以外の多くの方言でも、入聲由来の「不」が用いられている*1。

*1 梅祖麟 2013 は現代中國語方言の聲母が p-で始まる否定詞の分布と由来を 3 種に分けている(梅氏は併せて 4 種の否定詞のタイプを挙げているが、そのうち 1 種は唇鼻音「無」に由来する m-タイプ否定詞である。m-タイプ否定詞については本稿では割愛する)。

- 一、輕唇音聲母上聲字。來源是“不” *pjəgx > pjəu(方久切)。
浙南吳語。溫州、浦門、雲和 fu³, 慶元 fu³, 麗水 fau³。
- 二、輕唇音聲母入聲字。來源是“弗” *pjət > pjuət(分勿切)。
北部吳語。蘇州、丹陽、金華、開花 fə⁷, 上海 və⁷, 紹興 və⁸, 寧波 vɛ⁸, 龍游 fə⁷, 常山、玉山 fo⁷, 遂昌 fəu⁷。
- 三、重唇音聲母入聲字。來源是失落於-j-介音的“弗” *pjət > pjuət > puət。
官話。太原 pə⁷, 北京 pu⁵《中原音韻》(1324)魚模韻“入聲作上聲”下列“不、卜”等字), 揚州 pe⁷, 合肥 pə⁷, 杭州 pe⁷, 靖江 pə⁷
贛語。南昌、奉新 pət⁷, 臨川 put⁷, 黎州 pi⁷。
徽語。績溪 px⁷, 歙縣 pu⁷。

以上の「弗(分勿切)」と「不(方久切)」の變遷は以下のようにまとめられる(梅祖麟 2013: 2 による)。

*p̥iua̯t(弗) >	{	重讀 p̥iua̯t > fet(廣州), fu(北平) —— 字寫作“弗”
*p̥iuə̯g(不) >		輕讀 puət > pət(廣州), pu(北平) —— 字寫作“不” p̥iau > fau(廣州), fou(北平) —— 字寫作“否”

現代中國語の「不」字にはこのように奇妙な字音の變遷があったと想定されるが、入聲由來の「不」の成立に關聯して、検討すべき問題が2つある。

1つは、入聲の「不」がいつ成立したのか、である。

早期の字書を見てみると、六朝期の言語を反映した『原本玉篇』(すなわち『篆隸萬象名義』)は「不」を「甫負反。否也，弗也」として収めており、入聲音はない。

『廣韻』以前の唐代切韻殘卷、例えば切三(S2071)、王一(P2011)、王二、王三^{*2} はいずれも平聲の「不」を小韻代表字とし、又音として上聲と去聲を収録する。切三と王二には上聲の「不」は見られず、王三のみこれを収める。入聲の「不」はどの殘卷にも見られず、『廣韻』(11世紀初頭)に至って初めて出現する。

河野六郎 1937/1979: 54 によると、梁代の梵漢對音資料『孔雀明王呪經』は「不」を舒聲の pu で轉寫する。このほか、辻 1994: 4-5 は唐詩の文末助詞「不」が平聲と押韻している事實を指摘する。9世紀から10世紀の河西方言を反映した藏漢對音資料でも、「不」は舒聲の pu、phu 或いは bu で轉寫する。例えば『金剛經』の「不可思議 pu kha si 'gi」や、『道安法師念佛讚』の「不是 phu zhi」、「不慈 'bu dzi」など。一方「弗」は 'bur^{*3}(『阿彌陀經』)で轉寫される(以上、高田 1988: 247-297 による)。

このほか、「不」の諧聲字「否、罌、莽、丕」は上古ではいずれも舒聲であり、従って、上古音研究では「不」も同様に舒聲(幫母之部)と見なし^{*4}、*pə に復元する(復元音は Schuessler 2009 による)。

10世紀以降の字書では入聲の「不」が頻出する。例えば、『新集藏經音義隨函錄』(940年序)は「不言反 上“夫勿反”無也」とし(上田 1984)、『龍龕手鑑』(997年序)も部首「不」に對し「分勿切」と注し、「不」を入聲とする。

辻 1994: 7 はこれらの狀況を総合して、「「不」の字音は、唐代までは、一般的に非入聲音が用いられていたが、それ以降、入聲音が一般化していった。入聲音は、文獻的には10世紀以降に現れるが、語音として唐代から用いられていたとみるべきであろう」と主張する。

さらに敦煌出土の唐末寫本『守溫韻學殘卷』(P2012)は「弗絨颺黻綽不邴由弗分勿反」(傍線は筆者による)のように、「不」を入聲字(分勿反)として収める。これにより潘悟雲 2002: 307 と梅祖麟 2013: 5 は、「不」の分勿切の讀音(すなわち入聲音)は唐末五代に出現したと推測する^{*5}。この觀點は、辻 1994 の主張と概ね一致するものである。さらに、南北朝の江東方言を代表する『玉篇』と『切韻』(王仁昫『刊謬補缺切韻』及び切韻殘卷)に入聲の「不」がないことから、梅祖麟

*2 唐蘭 1964 によると、王三の成書年代は706年である。

*3 チベット語の-r は中國語の-t 入聲に對應する。

*4 『詩經』には「不」の押韻例はない。

*5 梅氏は、『守溫韻學殘卷』(P2012)の成書時期を唐末から五代に推定する。

2013：4-5 は南北朝時代の江東と河北の否定詞はともに「不」であったが、唐末五代に至って、否定詞 pjuət(弗)が華北中原地区に進出し、もともとの否定詞 pjəu(方久切の「不」)に取って代わったと考える。

實のところ、上で挙げた字書より早い時期の音注が、「不」が入聲で讀まれていた可能性を示す。中唐期に成立した慧琳の『一切經音義』(慧琳音義)^{*6}は、「髣髴」の「髴」の反切として「芳勿」(卷 77、卷 84、卷 100)、「忿勿」(卷 82)、「敷勿」(卷 87)、「芬勿」(卷 90)、「霏不」(卷 74)を挙げるが、このうち「霏不」の「不」が入聲、すなわち「弗」音を表していると考えなければ、「髴」の反切として成り立ち得ない。反切下字「勿」も「弗」も物韻に屬する^{*7}。

このほか、Boodberg 1934/1979：430-431 は東周時期にすでに「不」が入聲音を持っていたと推測する。魏克彬 2019：147 は、上古期に「不」が「不」と「弗(=不之)」の2種の字音を具えていた可能性を指摘する。一方で、魏培泉 2001：180-181 は、前漢から後漢の間の作品と後漢前期の『漢書』に「弗」が少ないことによって、「弗」はこの時すでに書寫上はほぼ「不」に取って代われ、しかも文字上は「不」であってもある方言では「弗」で讀んでいた可能性があったと述べる。Pulleyblank 1995：103 は漢から唐の間に「弗」は口語において「不」に取って代わったと見なしている。

このように、入聲の「不」がいつ成立したかについては、論者によって見解が異なる。

2つ目の問題は、「不」はなぜ「弗」の字音を獲得したのか、である。

Kennedy 1964：127-128 はこの点について以下のような考えを提示する：「不」と「弗」の機能は当初は區別があり、「弗」は「不」と前置代詞目的語「之」の合音であったが、否定文の代詞目的語前置現象が消失していくとともに、「不」と「弗」の區別も曖昧になり、「不」は一般的な否定詞として、「弗」の機能をも擔うようになり、同時に「弗」の字音を獲得した。

辻 1997：7 は、上古中國語の「不」と「弗」は異なった否定機能を果たしていたが、両者の機能的區別がなくなるとともに、「弗」という字が用いられなくなり、同時に「不」が「弗」の音を取り込んだと考える。

Pulleyblank 1995：105-106 は、「弗」のアスペクティックの意味及び「弗」と目的語の間の關係が弱まった結果、「弗」は「不」の強調型として保たれ、さらに漢代以降、「不」は *püt と *pə を表す一般的な書寫形式となり、最後、入聲の發音が優勢となった、と推測する。

梅祖麟 2013：3 は、先秦の「不」と「弗」には文法的區別があったが、後漢に至り、兩字は混用され、差がなくなったと指摘する。同時に梅氏は、前漢の昭帝「劉弗陵」の避諱によって「弗」が「不」に改められ、書面語中の否定詞が一律「不」となり、「弗」はその後の文獻ではなくなってしまったと考える。

このように「不」が「弗」の字音を獲得した原因については、基本的には「不」と「弗」の機能の接近を契機とするという考えが一般的であるが、ではなぜそれが字音の交代を促がしたかにつ

*6 慧琳の弟子景審の序文によれば、慧琳は『一切經音義』を建中末年(783年)に書き始め、元和2年(807年)に完成した。

*7 「髴」は『廣韻』には2種の字音が収められており、1種は入聲の物韻、もう1種は舒聲の末韻である(芳未切)。『慧琳音義』の「髴」も時に末韻を又音として収める(卷82「忿勿反又音芳味反」、卷90「芬勿反又音芳未反」)。一方で、舒聲の「不」は尤韻或いは有韻であるから、『慧琳音義』の「霏不切」の「髴」は『廣韻』の「芳未切」の「髴」に對應するものではない。

いて、説得力のある議論を展開したものは皆無である。

第 2 節以降、本稿は主に以上の 2 点をめぐって議論を展開するが、いま先にその結論を示せば、昭帝の避諱によって「不」と「弗」に「訓讀(義同換讀)」の如き作用が生じたこと、そして「イエスベルセンのサイクル (Jespersen's cycle)」と呼ばれる否定詞變化に関わる通言語的現象が、「不」が「弗」の字音を獲得するに際し、大きな影響を及ぼしたと筆者は考えている。また、その時期については、本稿では残念ながら、特定には至らなかったが、唐末五代まで時代を下らず、早ければ後漢にはすでに発生していた可能性があると思積もっている。

本稿ではまず第 2 節から第 4 節において、先行研究によりつつ、春秋戦國時代から秦代の「弗」が「不+之」の合音であったことを確認し、第 5 節で漢代において「弗」と「不」の區別が曖昧になり、「弗」が「不+之」の目的語内包型から「不」の強意型へと變化しつつあったことを述べ、第 6 節で「不」が「弗」の字音を獲得するに至った具體的メカニズムについて検証する。

2 上古中期中國語の「弗」と「不」の機能上の區別

上古中國語^{*8}の「弗」と「不」の區別に関して、最も影響力のある學説は丁聲樹 1935 である。丁氏は「弗」は目的語を省略した他動詞や介詞に對してのみ用いられ、一方「不」は自動詞や目的語を伴った他動詞に對して用いられると指摘しつつ、以下のような結論を提示する。

“弗”字似乎是一個含有“代名詞性的賓語”的否定詞，略與“不之”二字相當，“不”字則只是一個單純的否定詞。

〔「弗」は代名詞的目的語を内包した否定詞で、およそ「不之」に相當し、「不」は一方で單純な否定詞であったようだ〕

呂叔湘 1941/1984：79-80 はさらに「勿」と「毋」にも同様の區別があると見なした上で、以下のように述べる。

“毋”與“勿”之用法不同，“毋”爲單純式，“勿”爲含代名詞止詞式，略與“毋之”、“毋是”相等。其區別與“不”與“弗”之區別平行，“毋”與“不”相當，“勿”與“弗”相當。

〔「毋」と「勿」の用法の違いは、「毋」が單純型である一方で、「勿」が代名詞目的語内包型で、およそ「毋之」、「毋是」に相當するという点にある。その區別は「不」と「弗」の區別に平行し、「毋」は「不」に、「勿」は「弗」に相當する〕

*8 本稿は松江 2010：iii により上古中國語の時代を以下のように區分する。

上古初期中國語：殷、西周時代

上古中期中國語：東周(春秋戰國)時代

上古晚期中國語：秦、前漢時代

このほか、本稿では後漢から唐末五代を中古中國語に位置付ける。

Boodberg 1934/1979 :430 はこの基礎の上に、「弗」が「不之」の合音、すなわち「不**piuə* + 之**ti* > 弗**piuat*」であると推定し、その後 Graham 1952 は「勿」もまた「母之」の合音であるとの説を展開した。

「不+之 > 弗」という合音説に対しては、今に至るまでなお反論がある。例えば、黄景欣 1958 と何樂士 2004 は「不」は一般的な否定詞である一方、「弗」は強調の語気を帯びた否定詞であると考え、何莫邪 1992 は「弗」が“拒絶(refuse)”や“不能(fail to)”の意味を表していると指摘する。高思曼 1993 は「弗」が使役を表す「使」の反義語であり、「不使」に相当すると推測する。Aldridge 2010 は「弗」の韻尾*-t は後続の使役を表す動詞接頭辭*-s-に由来すると推測する。

とは言え、今日では合音説を支持する論者は多い。例えば、大西克也 1988、魏培泉 2001、魏克彬 2019 など。とりわけ、魏培泉 2001 は合音説の合理性を詳細に論證しており、説得力に富む。このほか、周守晉 2005 の楚簡・秦簡の「弗」に対する研究も、「弗」が目的語を内包しているという結論を支持するものとなっている(但し、周氏は「弗」が「不+之」の合音であるという結論には必ずしも與していない)*9。

次は「不」と「弗」の用例である。「不」は目的語を伴った動詞を否定できるのみならず、目的語を伴わない動詞も否定できる。言い換えれば、「不」はニュートラルな、無標(unmarked)の否定詞である。例えば、

- (1) 有事而不告我，必不捷矣。(『左傳』襄公 28 年)
[重大事があるのに私に教えなければ、きっと成功しない]
- (2) 智者不能察其變，辨者不能察其美。(馬王堆帛書『二三子問』3 行上)
[智者はその變を理解できず、辨者はその美を理解できない]
- (3) 人而不仁，如禮何。(『論語』八佾篇)
[人であるのに不仁であれば、禮に對してどうすることもできない]
- (4) 州徒(社)之樂而天下莫不語(娛)。(上博楚簡『君人者何必安哉(甲本)』4-5 號簡)
[州社の樂は、天下の人々は皆これを樂しんでおり、先王も自らその祭祀に参加し民を激勵する手段としていた]

一方で、「弗」は基本的に目的語を伴わない他動詞や介詞と共起する。例えば、

- (5) 雖有嘉肴，弗食，不知其旨也。雖有至道，弗學，不知其善也。(『禮記』學記篇)
[うまい料理があっても、それを食べなければ、その旨さはわからない。最上の道があっても、それを學ばなければ、その良さはわからない]
- (6) 下士昏(聞)道，大笑之。弗大笑，不足以爲道矣。(郭店楚簡『老子乙』9-10 號簡)
[下等の士が道について聞いたら、それを大いに笑い飛ばす。それを大いに笑い飛ばさねば、道とするには足りない]

*9 「弗＝不+之」は上古中期から晩期の狀況に過ぎず、上古初期の否定詞體系はこれとは大きく異なる。呂叔湘 1941/1984 と周法高 1953/1972 は早くから、春秋戰國時代以前の甲骨文・金文及び『尚書』の「弗」の用例が「弗＝不+之」の規則に合わないことを指摘している。甲骨文の「弗」と「不」については、拙文戸内 2019 を参照されたい。

- (7) 姑、姉、妹、女子子，已嫁而反，兄弟弗與同席而坐，弗與同器而食。(『禮記』曲禮上篇)
 [おば、姉、妹、娘が嫁いだのち歸ってきたら、兄弟はその者どもと席を同じくせず
 に座り、その者どもと器を同じくせずに食事をする]
- (8) 甲徙居，徙數謁吏_二(吏、吏)環，弗爲更藉。(睡虎地秦簡『法律答問』147 號簡)
 [甲が居を移す時、戸籍を移し、役人に報告するも、役人は戻って甲のために戸籍の
 變更をしない]

以上の用例は大西 1988 及び周守晉 2005 より引用したものである。例(5)(6)は動詞が「弗」に修飾されている用例であるが、(5)「弗食／弗學」と(6)「弗大笑」の「弗」には代名詞目的語「之」が含まれており、「弗食」、「弗學」、「弗大笑」はそれぞれ「不之食(＝不食之)」、「不之學(＝不學之)」、「不之大笑(＝不大笑之)」に相當する。例(7)(8)は介詞が「弗」に修飾されている例であるが、(7)「弗與同席而坐／弗與同器而食」と(8)「弗爲更藉」はそれぞれ、「不之與同席而坐(＝不與之同席而坐)」、「不之與同器而食(＝不與之同器而食)」、「不之爲更藉(＝不爲之更藉)」に相當する。「不＋之(目的語)＋V」の語順は一見すると、中國語の基本語順 SVO に反しているように見えるが、上古中期中國語では、否定文中の代名詞目的語は動詞前に前置し、否定詞の後ろに置かれるのが常態である^{*10}。例えば、

- (9) 不吾知也。(『論語』先進篇)
 [私のことを知らないのである]
- (10) 我未之學也。(『孟子』滕文公上篇)
 [私はまだそれを學んでいない]
- (11) 八世之後，莫之與京。(『左傳』莊公 22 年)
 [八世の後、これより盛んな者はいない]
- (12) 非聖者莫之能也。(郭店楚簡『六德』3 號簡)
 [聖者でなければそれをできる者はいない]

「不＋之＞弗」という合音形成の肝はこのような否定文中の代名詞目的語前置現象にあると言える。してみれば、「弗 V」出現の前に「不之 V」の段階があったはずであるが、ところが魏培泉 2001：130 によると、傳世文獻に「不之 V」は僅か 3 例を数えるのみである^{*11}。下の例はそのうちの 1 つである。

*10 この規則は厳格なものではなく、否定文中の代名詞目的語が前置されない用例も散見される。例えば、

- 吾不知之矣。(『論語』泰伯篇)
 [私はそれを知らない]
有事而不告我。(『左傳』襄公 28 年)
 [重大事があるのに私に教えなければ、きっと成功しない]

*11 「不」が「之」以外の代名詞と接續する例は良く見られる。例えば、

- 不患人之不己知，患不知人也。(『論語』學而篇)
 [人が自分を知らないのを氣に病まず、人のことを知らないことを氣に病む]
餘不女忍殺。宥女以遠。(『左傳』昭公元年)
 [私はお前を殺すことが耐えられない。お前を赦して遠ざけよう]

(13) 其視富貴也，苟可得已，則必不之賴。(『呂氏春秋』離俗篇)

〔その 4 人は富をみると、万一得ることができるものであっても、それを利があるものとは見なさない〕

魏克彬 2019：139-140 は「不之 V」が侯馬盟書「委質類」と溫縣盟書「縣書類」に見られ、さらに「不之 V」と「弗 V」が異文関係をなしていることを指摘する。例えば、

(14) a. 閔爰之子孫，遇之行道而弗殺…。(侯馬盟書「委質類」156：20)

〔閔爰の子や孫については、これに道で出くわし、その者を殺さなければ…〕

b. 閔伐及其子孫，逢之行道不之殺…。(侯馬盟書「委質類」3：26)

〔閔伐やその子や孫については、これに道で出くわし、その者を殺さなければ…〕

(15) a. 所[參盟人名]敢知僞書而不言者…。

〔もし參盟人が報告を偽造したことを知っていながら通告しなければ…〕

b. 所[參盟人名]敢知僞書而不之言者…。(溫縣盟書「縣書類」*12)

〔もし參盟人が報告を偽造したことを知っていながら、そのことを通告しなければ…〕

魏克彬 2019：142 はこれらの例を、「弗」が「不之」に相當するという學説を強力に支持するものと捉えている。

ところで、「不之」から「弗」への合音形成過程については、論者の意見に出入りがある。大西 1988：241 は Boodberg 1934/1979^{*13} 及び周法高 1953/1972^{*14} に同意しつつ、「兩者(「不」と「之」：引用者注)が緊密に、またぞんざいに發音された結果「之」は音節としての獨立性を失い、「不」に附着して「弗」が生まれた」と説明する。魏克彬 2019：142-143 も「不之 > 弗」の合音説に同意したうえで、代名詞目的語「之」が「不」と動詞の中間に前置されたのち、自然に「不」と「之」が合音したと考える。一方、魏培泉は「不之 V > 弗之 V > 弗 V」という變化過程を提示する。魏氏はこの種の變化過程はまず「之」の聲母が「不」の韻母に影響して「不」を入聲字「弗」に變え、その後「之」が脱落して「弗」が動詞に隣接するようになったと推測するのである(魏培泉 2001：134)。なお魏克彬 2019：145 は魏培泉説に反駁して、早い時期の出土盟書に「不之」と「弗」が通用している例がある一方で、「弗之 V」の例がないことに基づき、「不之」が直接「弗」に變化し

*12 溫縣盟書の用例は魏克彬 2019：139 からの引用である。

*13 Indeed, the final -t of fu, KD 47 pjuət can be well explained as vestige of an original enclitic chih KD 1210 ìsi < ì- attached to the regular negative pu KD 37 pjuə < -uj. (Boodberg 1934/1979：430)

〔實際、「弗」(KD 47 の pjuət)の韻尾-tは、もともと接辭であった「之」(KD 1210 の ìsi < ì-)が普通否定詞「不」(KD 37 の pjuə < -uj)に附着した痕跡として説明できる〕

なお、「KD」はBernhard Karlgrenの*Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese*(Pari：Libr. Orientaliste P. Geuthner, 1923)の番號を示す。

*14 「不」(或「母」)和「之」接觸的機會很多，也許「之」字因為輕讀的緣故，在快說時便脫去了韻母而和前面「不」、「母」拼和了。(周法高 1953/1972：46)

〔「不」(或いは「母」)は「之」と接觸する機會が多く、「之」が輕讀されたため、速く發音したとき韻母が脱落し、前の「不」「母」と併合したのかもかもしれない〕

たとえ、その間に中間的段階があったとは見なしていない。

3 上古中期の「弗≠不+之」の違反例

上古中期の文献には「弗」が「弗＝不+之」の規律に違反した用例が散見される。傳世文献中の「弗」が流傳過程中に後世の人によって書き改められた可能性に鑑み、本稿では出土資料を中心に「弗≠不+之」の違反例を見てみたい。

魏培泉 2001：191-199 はこの種の違反例がおよそ 3 つのタイプに分類できることを指摘するが、これらはいずれも、当時の人々の「弗」に対する語源意識の弱まりを示すものであると考えられる。

(一)弗 V 之

この形式は傳世文献と出土文献雙方に見られる。例えば、

- (16) 雖與之俱學，弗若之矣。(『孟子』告子上篇)

[その人と共に學んだが、敵わなかった]

- (17) 知之者，同於義而異於俗。弗知之者，異於義而同於俗。(『韓非子』姦劫弑臣篇)

[このことを知る者は、義においては同じでも俗においては異なる。このことを知らない者は、義においては異なるが俗においては同じである]

- (18) 人雖曰不利，吾弗信之矣。(上博楚簡『緇衣』23 號簡)^{*15}

[人は利がないと言うが、私はそれを信じない]

- (19) 无罪而殺人，有死弗爲之。(馬王堆帛書『五行』92 行)

[罪がないのに人を殺すことは、自が死ぬことがあってもそのようなことをしない]

魏培泉 2001：192-193 は併せて 10 例の傳世文献の用例^{*16} と 9 例の出土文献の用例を挙げ、申紅義 2015：128-129 は 9 例の出土文献の用例を挙げる。うち 3 例は馬王堆帛書『五行』の傳文であるが、傳文は後世に加えられたものであることから、魏克彬 2019：144 は「弗 V 之」の違反例を古い段階の言語習慣を反映したものではないと考える。

「弗 V 之」タイプの由來について大西 1988：235 は、当時「弗」に「之」が内包されているという意識はなお存在していたが、それがやや薄れていたために、「之」の意味をはっきりさせたい気持ちが働くときに、「弗 V 之」(及び後段の「弗之 V」)形式が用いられたのだろうと、推測する。魏克彬 2019：144 は「弗」が含んでいた「之」が明確でなくなったため、動詞の目的語に對する状態變化を強調するため、動詞の後ろに目的語「之」を加えることができた指摘する。このほか筆者は、上のような例は語源意識の弱まりによって「弗」が強意型否定詞(後述)となりつつある初期の段階のものと考えている。

(二)弗之 V

*15 今本『禮記』緇衣篇は「人曰雖不利，吾不信」に作る。

*16 魏培泉はこれに加えて「弗 V 此」の用例を 1 例挙げる。

弗過此矣。(『左傳』昭公 11 年)

このタイプは主に傳世文獻に見られ、魏培泉 2001：191-192 は 7 例を数える。下の例はその一部である。

- (20) 無節於内者，觀物弗之察矣。(『禮記』禮器篇)
〔内に節度なき者は、物を見てもそれについて理解しない〕
- (21) 東方有莒之國者，其爲國甚小，間於大國之間，不敬事於大，大國亦弗之從而愛利。(『墨子』非攻中篇)
〔東方に莒という國があった。國としては極めて小さく、大國の間に挟まれていたが、大國に敬って仕えることなく、大國もまたこの小國を従えて、大事にしたり、利益を與えたりすることがなかった〕

魏克彬 2019：144 によれば、このタイプは出土文獻に 1 例しかない。

- (22) 可以弗之畔矣夫。(定州漢簡『論語』^{*17} 雍也篇 133 號簡)^{*18}
〔道に背かなくても良い〕

このほか、周守晉 2005：189 は、先秦の出土文獻に「弗之 V」タイプがないことを指摘する。「弗之 V」タイプは、早期の時期の出土文獻に見られない以上、上古中期の言語現象を反映したものではないと考えられる。魏克彬 2019：145 は、「弗之 V」タイプは漢代以降の傳承過程中に書き改められて成立した文型と見なす。以上により、「弗之 V」タイプは「不之 V > 弗 V」の變化過程の中間階段(魏培泉 2001)ではないと言えよう。

(三)弗 V + NP

このタイプは主に傳世文獻に見られる。魏培泉 2001：195-196 は 13 例を数える。下の例はその一部である。

- (23) 人情莫不愛其子，今弗愛其子，安能愛君。(『韓非子』難一篇)
〔人の情で自らの子を大切にしない者はいない。もし自分の子を大切にしないのなら、どうして君を大切にすることができようか〕
- (24) 始吾敬子。今子，魯囚也，吾弗敬子矣。(『左傳』莊公 11 年)
〔かつて私はあなたを敬愛していた。いまあなたは魯に囚われてしまっているので、私はもうあなたを敬愛していない〕

魏氏はさらに出土文獻の用例を 2 例挙げる。そのうちの 1 例は次節の(26)「弗置嗇夫」である

*17 定州漢簡『論語』は河北省定縣定州八角廊四十號前漢墓より出土したもので、墓主は五鳳 3 年(B.C.55)に逝世した中山懷王劉脩、その時代は昭帝より下る。ところが、簡本『論語』は昭帝の諱「弗」字を避けておらず、25 例の「弗」字が見える。これについて魏培泉 2001：205-206 は簡本『論語』の書寫年代は昭帝期より遅いが、『論語』の地位が高いために、筆寫者は「弗」を書き改めなかったと見なす。申紅義 2015：128 は埋葬より簡本が書寫された時間の方が早かったと考える。一方、張玉金 2012：10 はもとより「弗／不」避諱交替説を退ける。

*18 今本『論語』及び吐魯番出土唐寫本『論語』は「弗」の後に「之」字がない。

が、本稿ではこれを違反例とは見なさない(後述)。

なお大西 1988：235 は「弗V+NP」タイプは「弗V之」の類推により形成されたものとする^{*19}。

4 秦代の「弗」

秦代の「弗」もなお「不+之」に相当すると見て相違ない。

申紅義 2015：128-129 は秦簡中「弗＝不之」に違反する例を 8 例挙げる。しかしこれは魏克彬 2019：145 によれば、うち 6 例が二重目的語動詞によって構成された「弗＋V＋NP」であり、「弗」が内包する「之」はもう 1 つの目的語(直接目的語或いは間接目的語)を示すものと理解される。例えば、

(25) 材弗言賀。(嶽麓秦簡『芮盜賣公列地案』70 號簡正)

[材(人名)は賀(人名)にそのことを言わなかった]

魏克彬 2019：145 はこの一文の「弗」が内包する「之」は動詞「言」の直接目的語を示している、すなわち「材不言之(于)賀」に相当すると指摘する。また例えば、

(26) 官嗇夫免，□□□□□□其官亟置嗇夫。過二月弗置嗇夫，令丞爲不從令。(睡虎地秦簡『秦律十八種』189 號簡)

[役所の嗇夫(官名)が免職したとき、... その役所は速かに嗇夫を置く。2 ヶ月を過ぎてその役所に嗇夫を置かなければ、令と丞は廢令と見なす]

周守晉 2005：179-180 は「弗」が内包する「之」は間接目的語の「其官」を指し、その文義は“過了兩個月‘令、丞’還沒有爲‘其官’置嗇夫，就是不從令(二ヶ月を過ぎて‘令・丞’が‘その官’に對して嗇夫を置いていなければ、廢令となる)”であると指摘する。謂わば、「弗置嗇夫」は「不置嗇夫(于)其官」に相當するものである。

申紅義 2015 が引く残り 2 つの例は動詞が「知」のものであるが、それを否定する「弗」が内包する「之」は、埋め込み文(embedded clause)の目的語と見られる。例えば、

(27) 甲盜錢以買絲，寄乙，乙受，弗知盜，乙論何也。(睡虎地秦簡『法律答問』11 號簡)

[甲が金錢を盗んで絲を買い、乙に送り、乙が受け取るも、これを盗品として認識していなければ、乙の處罰はどのようなものであろうか]

*19 なお、何樂士 2004：570-572 は、多くの「弗＝不+之」原則に違反する用例を挙げるが、その中には「弗＋二重目的語動詞＋目的語」や「弗＋形容詞／自動詞」、受事主語文のものが少なくない。これらは例外とは見なせない。というのも、「弗＋二重目的語動詞＋目的語」の「弗」が内包する「之」は二重目的語のうち 1 つの目的語を擔っている；「弗」に修飾された自動詞、形容詞及び名詞はいずれも他動詞と見なされる(すなわち使動用法或いは意動用法)；「受事(主題)＋弗＋V」の「弗」に内包された「之」は文頭の主題(topic)を照應することがある。實際のところ、「弗＝不+之」原則に違反する用例は何氏が挙げるよりも少ない。

魏克彬 2019：146 はさらに、「知」が助動詞^{*20}、「盜」が名詞述語、且つ他動詞(すなわち意動用法)であり、この一文は「不知盜之」すなわち「不知以之爲盜」と理解すべきである、と指摘する。

なお周守晉 2005：187 によると、「弗」は楚簡では多くはなく、また本稿の調査によれば、楚國內部文獻^{*21}ではとりわけ少ない。例えば包山楚簡には併せて 7 例の「弗」があるが、そのうち 4 例が同一内容のもので(「子弗返」122-123 號簡)、その他 3 例は、2 例が「弗受」(130 號簡)、1 例が「弗能詣」(156 號簡)である。新蔡楚簡は 1 例の「弗」(「弗卹也」乙四 95 號簡)を数えるのみである。上博楚簡の楚國內部文獻には 2 例しかなく、1 例は「四海之内、莫弗聃(信)^{*22}」[四海の中で、このことを信じない者はいない](『命』7 號簡)で、もう 1 例は「稚人弗敢止」[稚人はこの者を止めようとはしなかった](『昭王毀室』3 號簡)である。これとは対照的に、非楚國內部文獻には多くの「弗」が見られる。

秦簡では「弗」は割合多く、且つ「弗」の秦簡における用法は楚簡よりも複雑である。このような状況は秦楚の方言差を反映しているものと考えられる。

5 漢代の「弗」

前漢以降、多くの文獻で「不」が「弗」に取って代わり、「弗」は徐々に消えていく。熊昌華氏の統計によると、戦国楚簡の「不」と「弗」の使用率は 12：1 で、秦簡の使用率は 8.5：1 であるが、漢簡の使用率は 24：1 となる^{*23}。また、申紅義 2015：128 によれば、睡虎地秦簡の字数はおよそ 35000 字で、うち「弗」は 106 例を数えるが、前漢の中後期から後漢中後期の肩水金關漢簡(壹～參)の字数はおよそ 60000 字で、「弗」は 2 例のみである。

「弗」字の減少の原因の 1 つは、前漢昭帝(B.C.87～74)の名「弗陵」を避けて「不」に改めた「避諱」にあると考えられる^{*24}(大西 1988：164-165、魏培泉 2001：165、魏克彬 2019：148)。漢代の避諱は通常、諱を同義語ないしは類義語に改める。例えば、高祖劉邦の「邦」を避けて「國」字に改めたり、武帝劉徹の「徹」を避けて「通」に改めたりするといったものである^{*25}。

「不」で諱「弗」に代替している以上、「不」と「弗」は前漢において同義語ないし類義語であっ

*20 「知」を助動詞と解釋するのは一般的ではないが、魏氏はそれがどのような助動詞か詳しく述べていない。

*21 楚國內部文獻とは包山楚簡、望山楚簡や新蔡楚簡などの楚國內部で造られた資料、及び上博楚簡の楚王關連故事などの楚國と密接な関わりのある典籍である(大西 2013：134-135)。このような資料のみが戦国時代楚國の言語特徴を真に反映していると考えられる。

*22 「聃(信)」に対する字釋は單育辰 2011 による。

*23 この數値は熊昌華《簡帛副詞研究》(西南大學博士學位論文、2013 年)によるが、筆者は未見である。本稿では魏克彬 2019：148 より引用した。

*24 その根據の 1 つは『漢書』昭帝紀の顏師古注である。顏師古は荀悅を引きつつ「諱弗之字曰不」と述べている。

*25 漢代の避諱の實際の状況はなお不明な點が多い。一般的に漢代の避諱は嚴格ではなかったと考えられているが、「卒哭乃避」(皇帝崩崩後にその諱を避ける)か「生而諱名」(皇帝在世中にその諱を避ける)かについては、諸家の見解は一致していない。影山 2003 は漢代の避諱に對し詳細な檢證を行い、前漢宣帝時(B.C.74～48)は「生而諱名」であり、少なくとも上書のときは避諱せねばならない規則があったと指摘する。もし昭帝時も同様に「生而諱名」であるならば、避諱によって「弗」を「不」に改める現象は、昭帝在位の紀元前 87 年から 74 年前後に始まったことになる。

たはずである。上で取り上げたように、先秦時期この 2 つの否定詞には明確な機能差があったが、昭帝期以降に「弗」が「不」に置き換えられている以上、両者は前漢のある時期から徐々に接近し始め、区別は上古中期ほど明確でなくなったと考えられる。

魏培泉 2001：164-165 の調査によると、秦統一前後に書寫された睡虎地秦簡と前漢武帝期に書寫された銀雀山漢簡の「弗」の「不」に對する使用比率は先秦の傳世文獻より高く、およそ 1/10 であるが、『尚書』以外の傳世文獻では、『左傳』が 1/10 を超えるのを除き、出土文獻よりはるかに少なく、『儀禮』、『論語』、『商君書』、『管子』、『晏子春秋』、『荀子』等の典籍ではわずか數例を數えるに過ぎない。魏氏はこれにより、傳世文獻の「弗」が少ない理由を昭帝の諱に歸しているのである。

大西氏と魏克彬氏は今本『老子』と簡帛『老子』の比較を通して、避諱説が妥當であることの論據としている。以下は郭店楚簡、馬王堆帛書^{*26}、北大漢簡^{*27}と今本(王弼本)の比較である。

- (28) a. 含(含)德(德)之厚(厚)者，比於赤子。蝮(虺)蟲(蝮)蛇(虺)弗(弗)螫，攫(攫)鳥(攫)猛(猛)獸(獸)弗(弗)搏。(郭店楚簡『老子』甲本 33 號簡)
 [德を内に厚く持つ者は、赤子に例えられる。毒蟲や毒蛇もそれを刺さず、猛鳥もそれを捕えない]
- b. □□之□比於赤子。蜂(蜂)螫(螫)蛇(虺)弗(弗)螫(螫)，據(據)鳥(攫)猛(猛)獸(獸)弗(弗)搏(搏)。(馬王堆帛書『老子』乙本 16 行下-17 行下)
 [(德を内に厚く持つ者は、)赤子に例えられる。毒蟲や毒蛇もそれを刺さず、猛獸や猛鳥もそれを捕えない]
- c. 含德之厚者，比於赤子。蝮(蜂)螫(虺)蛇(虺)弗(弗)螫(螫)，猛(猛)獸(攫)鳥(攫)弗(弗)搏(搏)。(北大漢簡『老子』18 號簡)
 [德を内に厚く持つ者は、赤子に例えられる。毒蟲や毒蛇もそれを刺さず、猛獸や猛鳥もそれを捕えない]
- d. 含德之厚，比於赤子。蜂(蜂)螫(虺)蛇(虺)不(不)螫(螫)，猛(猛)獸(攫)不(不)據(據)，攫(攫)鳥(攫)不(不)搏(搏)。(今本『老子』德經 55 章)
 [德を内に厚く持つ者は、赤子に例えられる。毒蟲や毒蛇も刺さず、猛獸も寄って来ず、猛鳥も捕えない]
- (29) a. 下(下)士(昏)聞(聞)道(道)，大(大)笑(之)之。弗(弗)大(大)笑(之)，不(不)足(足)以(以)為(為)道(道)矣(矣)。(郭店楚簡『老子』乙本 9-10 號簡)
 [下等の士が道について聞いたなら、それを大いに笑い飛ばす。それを大いに笑い飛ばさねば、道とするには足りない]
- b. 下(下)士(聞)道(道)，大(大)笑(之)之。弗(弗)笑(之)，□□以(以)為(為)道(道)。(馬王堆帛書『老子』乙本 4 行下)
 [下等の士が道について聞いたなら、それを大いに笑い飛ばす。それを大いに笑い飛ばさねば、道とするには足りない]

*26 湖南省長沙市東郊馬王堆漢墓 3 號墓より出土。同墓出土の木牘に「十二年二月乙巳朔戊辰」と書いてあることから、その埋葬年代は前漢文帝 12 年(B.C.168)と判断できる。《長沙馬王堆漢墓簡帛集成(肆)》(1 頁)によると、『老子』甲本は高祖末期より前に書寫されたもので、一方、乙本は馬王堆 3 號墓が埋葬された文帝 12 年を下限とする。

*27 《北京大學藏西漢竹書(貳)》(2 頁)は、北大漢簡の書寫年代は主に武帝後期であり、その下限は宣帝を下らないと推定する。

- c. 下士聞道，大笑之。弗笑，不足以爲道。(北大漢簡『老子』4 號簡)
〔下等の士が道について聞いたら、それを大いに笑い飛ばす。それを大いに笑い飛ばさねば、道とするには足りない〕
- d. 下士聞道，大笑之。不笑，不足以爲道。(今本『老子』德經 41 章)
〔下等の士が道について聞いたら、それを大いに笑い飛ばす。大いに笑い飛ばさねば、道とするには足りない〕
- (30) a. 智者弗言。(言，言)者弗知。(郭店楚簡『老子』甲本 27-29 號簡)
〔知者は（何かを）言わない、またあれこれ言うものは何も知らない〕
- b. □□弗言。(言，言)者弗知。(馬王堆帛書『老子』甲本 38 行)
〔知者は（何かを）言わない、またあれこれ言うものは何も知らない〕
- c. 智者弗言。(言，言)者弗知。(北大漢簡『老子』19 號簡)
〔知者は（何かを）言わない、またあれこれ言うものは何も知らない〕
- d. 知者不言，言者不知。(今本『老子』德經 56 章)
〔知者は言わない、またあれこれ言うものは何も知らない〕

簡帛『老子』はいずれも昭帝以前の抄本であるので、多くの「弗」字が見えるが、今本『老子』の成書年代は後漢以後であるため、「弗」は避諱により「不」に改められている。張玉金 2012：4-6 の統計によると、楚簡『老子』の「弗」字は併せて 20 例を見ることができ、馬王堆帛書本はそのうち 16 例を残しているが、一方今本では多くが「不」に改められている。これとは対照的に、「不」が今本で「弗」に改められることはない。

さらに大西氏は今本『老子』の「不」が前漢初期に「弗」で書かれていた可能性があることを指摘する。これは、『淮南子』所引の『老子』によって確かめられる。

- (31) a. 故老子曰：“道沖而用之，又弗盈也。”(『淮南子』道應訓)
〔故に老子は言った、「道は空の器のようなものであるが、用いても、それを満たすことはない」と〕
- b. 道沖而用之，或不盈。(『老子』道經 4 章)
〔道は空の器のようなものであるが、それを用いても、満ちることはない〕

周知のように、避諱は間違いなく「弗」字減少の重要なファクターである。しかし「弗」字減少の原因は避諱だけではない。というのも、昭帝より前の文献にも「不」と「弗」が、テキストの違いによって異文を構成している用例が見られるからである。例えば、以下の例はいずれも前漢初期以前の出土文献における「弗」と「不」の交替を示している。

- (32) a. 能進之，爲君子，弗能進也，各止於其里。(郭店楚簡『五行』42 號簡)
〔五徳を進めることができれば君子となり、それを進めることができなければ、各々自らの村里に止まる〕
- b. 能誰(進)之，爲君子，不能進，各止於其□。(馬王堆帛書『五行』37 行)
〔五徳を進めることができれば君子となり、進めることができなければ、各々自らの村里に止まる〕
- (33) a. □不言而善應，不召而自來，彈(禪)而善謀。(馬王堆帛書『老子』甲本 79 行)

- 〔物言わずに良く答え、招かずとも自ら来りて、穏やかに良く策を講じる〕
- b. 不言而善應，弗召而自來，單(繹)而善謀。(馬王堆帛書『老子』乙本 37 行下)
〔物言わずに良く答え、それを招かずとも自ら来りて、穏やかに良く策を講じる〕
- c. 不言而善應，弗召自來，黜(默)然善謀。(北大漢簡『老子』37 號簡)
〔物言わずに良く答え、それを招かずとも自ら来りて、黙って良く策を講じる〕
- d. 不言而善應，不召而自來，繹然而善謀。(今本『老子』德經 73 章)
〔物言わずに良く答え、招かずとも自ら来りて、穏やかに良く策を講じる〕
- (34) a. 天之道，利而不害。人之道，爲而弗爭。(馬王堆帛書『老子』乙本 32 行上)
〔天の道は利益を與えるも、害を下すことはない。人の道は營んで争わない〕
- b. 天之道，利而弗害。人之道，爲而弗爭。(北大漢簡『老子』122 號簡)
〔天の道は利益を與えるも、人に害を下すことはない。人の道は營んで争わない〕
- c. 天之道，利而不害。聖人之道，爲而不爭。(今文『老子』德經 81 章)
〔天の道は利益を與えるも、害を下すことはない。聖人の道は營んで争わない〕
- (35) a. 三歲弗得。(馬王堆帛書『周易』21 行下)
〔三年間、それを手に取らない〕
- b. □歲不得。(阜陽漢簡『周易』*28 150 號簡)
〔三年間、手に取らない〕
- c. 三歲不得。(今文『周易』坎)
〔三年間、手に取らない〕

これに加えて、『史記』にも先秦の典籍が「弗」で作る個所を「不」で引く例がある。

- (36) a. 今我民罔弗欲喪。(『尚書』西伯戡黎篇)
b. 今我民罔不欲喪。(『史記』殷本紀)
〔いま我が方の民に商が滅び去ることを望んでいない者はない〕
- (37) a. 韓強與周地，將以疑周於秦。寡人不敢弗受。(『戰國策』東周策・秦假道於周以伐韓)
b. 韓彊與周地，將以疑周於秦也。周不敢不受。(『史記』周本紀)
〔韓が無理やり周に土地を与えるのは、周に秦を疑わせようとしているのであり、周は(これを)進んで受け取らないわけにはいかない〕
- (38) a. 至于武王，昭前之光明而加之以慈和，事神保民，莫弗欣喜。(『國語』周語上)
b. 至于文王、武王，昭前之光明而加之以慈和，事神保民，無不欣喜。(『史記』周本紀)
〔文王、武王に至っては、先祖の光明をあきらかにし、慈愛と調和を加え神に仕え、民を収めたので、天下に(これを)喜ばない者はいなかった〕

このような異文が形成された原因として、4 種の可能性を想定できよう：1、司馬遷自身が書き

*28 阜陽漢簡『周易』は安徽阜陽雙古堆一號漢墓で出土したものである。墓主は文帝 15 年(B.C.165)に逝去した第二代汝陰侯夏侯灶であり(宋迎春 2006: 59)、竹簡の書寫年代はこれより早いと考えられる。

改めた；2、司馬遷が参照した典籍が今本と異なっていた；3、後世の人が『史記』を書き改めて傳えた；4、後世の人が先秦の典籍を書き改めて傳えた。もし司馬遷自身が書き改めたのであれば、「弗」を「不」に書き改める現象は武帝期より前に既にあったということになる。

さらに、大西 1988 の調査によると、馬王堆『老子』乙本の中で「弗」を用いることができるころでは、9割がた「弗」を用いているが、『史記』の4編(劉敬叔孫通列傳、袁盎鼂錯列傳、東越列傳、太史公自序)の中で「弗」が用いられるところでは4割ほどしか「弗」を用いていない。ここからも前漢中期には「弗」の使用が徐々に減少している傾向を見て取れる。

前漢初期の漢簡と『史記』における「弗」と「不」の交替現象は、どのように解釋すべきであろうか。魏克彬 2019：148-149 は、代名詞目的語前置現象が漢代に徐々に消失する傾向にあったことが、その原因の1つであると指摘する。上古中期の目的語前置規則はそれほど厳格ではなかったが、前置が占める割合が多かった。前漢に至り、前置と後置の割合には大きな変化があった。周光午 1959 はかつて先秦・兩漢・魏晉南北朝の典籍中の否定文目的語の語順について大規模な調査を行い、以下のような結果を得ている。

	前置	後置
先秦	461	560
兩漢	85	170
魏晉至唐	15	126

この他、魏兆惠 2009：79 の統計によると、『淮南子』と『史記』において、「不」を用いた否定文の、目的語前置と後置の比率はそれぞれ2：16と13：39である。

魏培泉 2001：165 は、避諱に加え、古字を當時通用していた文字に改めたのも、「不」が「弗」に取って代わったもう1つの原因であろうと推測している。これは言い換えれば、前漢初期にはすでに「不」と「弗」の機能が接近しつつあったことを意味する。

事實、『史記』の同一事跡に対する敘述において、多くの「弗」と「不」の異文^{*29} を見ることができる。これは司馬遷の時代に、「不」と「弗」どちらを用いてもよい状況があったことを示している。例えば、

- (39) a. 如此弗禁，則主勢降乎上，黨與成乎下。(『史記』始皇帝本紀)
 [このようにこれ(学問)を禁止しなければ、上においては君主の勢力が衰え、下においては徒黨が生じる]
 b. 如此不禁，則主勢降乎上，黨與成乎下。(『史記』李斯列傳)
 [このように禁止しなければ、上においては君主の勢力が衰え、下においては徒黨が生じる]
- (40) a. 邯恐，使長史欣請事，趙高弗見，又弗信。(『史記』秦始皇本紀)
 [章邯は恐れ、長史欣を使って趙高に指示を請わしめたが、趙高はこれに(長史欣)に会わず、またこれ(長史欣)を信じなかった]
 b. 章邯恐，使長史欣請事。至咸陽，留司馬門三日，趙高不見，有不信之心。(『史記』項羽本紀)

*29 これらの異文の一部は後世の人々書き改めたものかもしれないし、また司馬遷が基づくところの典籍の版本の違いかもしれない。

- [章邯は恐れ、長史欣を使って趙高に指示を請わしめた。長史欣は咸陽に着き、司馬門に3日留まるも、趙高は会わず、信じない心があった]
- (41) a. 臧荼之國，因逐韓廣之遼東，廣弗聽，荼擊殺廣無終。(『史記』項羽本紀)
[臧荼は自分の國に行つて、韓廣を追い拂つて遼東に行こうとしたが、廣はこのことを聞き入れず、荼は廣を無終で撃ち殺した]
- b. 故燕王韓廣徙王遼東，廣不聽，臧荼攻殺之無終。(『史記』高祖本紀)
[もとの燕王韓廣を移して遼東の王としたが、廣は聞き入れず、臧荼はこれを無終で殺した]
- (42) a. 項王聞龍且軍破，則恐，使盱臺人武濞涉往說淮陰侯。淮陰侯弗聽。(『史記』項羽本紀)
[項王は龍且の軍が破られたと聞いて恐れ、盱臺の人武濞に淮陰侯を説得するよう行かせたが、淮陰侯はこれを聞き入れなかった]
- b. 項羽聞龍且軍破，則恐，使盱臺人武濞往說韓信。韓信不聽。(『史記』高祖本紀)
[項羽は龍且の軍が破られたと聞いて恐れ、盱臺の人武濞に淮陰侯を説得するよう行かせたが、淮陰侯は聞き入れなかった]
- (43) a. 又比殺三趙王，滅梁、趙、燕以王諸呂，分齊爲四。忠臣進諫，上惑亂弗聽。(『史記』呂太后本紀)
[また呂氏一族は、立て続けに3人の趙王を殺し、梁、趙、燕を滅ぼして呂氏一族を王に立て、齊を4つに分けた。忠臣が進言しても、呂太后は心が迷い亂れており、これを聞き入れなかった]
- b. 又殺三趙王，滅梁、燕、趙以王諸呂，分齊國爲四。忠臣進諫，上惑亂不聽。(『史記』齊悼惠王世家)
[また呂氏一族は、3人の趙王を殺し、梁、趙、燕を滅ぼして呂氏一族を王に立て、齊國を4つに分けた。忠臣が進言しても、呂太后は心が迷い亂れており、聞き入れなかった]
- (44) a. 乃爲帛書以飯牛，詳弗知也，言此牛腹中有奇。(『史記』孝武本紀)
[文成はそこで帛書を書いて牛に食べさせ、そのことを知らぬふりをし、この牛の腹の中に奇瑞があると言った]
- b. 乃爲帛書以飯牛，詳不知，言曰此牛腹中有奇。(『史記』封禪書)
[文成はそこで帛書を書いて牛に食べさせ、知らぬふりをし、この牛の腹の中に奇瑞があると言った]
- (45) a. 於是上絀偃、霸，盡罷諸儒弗用。(『史記』孝武本紀)
[そこで、今上は徐偃と周覇を退け、諸儒をみな辞めさせ、彼らを用いないこととした]
- b. 於是上絀偃、霸，而盡罷諸儒不用。(『史記』封禪書)
[そこで、今上は徐偃と周覇を退け、諸儒をみな辞めさせ、用いないこととした]
- (46) a. 兕、旄牛、犀、象之屬弗用。(『史記』孝武本紀)
[兕、旄牛、犀、象の類はこれを用いなかった]
- b. 兕、牛、犀、象之屬不用。(『史記』封禪書)
[兕、牛、犀、象の類は用いなかった]
- (47) a. 朕以眇眇之身承至尊，兢兢焉懼弗任。(『史記』孝武本紀)

〔朕は小さな身を以て、最上の尊い位を受け継ぎ、慎みながらそれを擔うことができ
ないことを恐れている〕

- b. 朕以眇眇之身承至尊，兢兢焉懼不任。(『史記』封禪書)

〔朕は小さな身を以て、最上の尊い位を受け継ぎ、慎みながら擔うことができな
いことを恐れている〕

- (48) a. 方士所興祠，各自主，其人終則已，祠官弗主。(『史記』孝武本紀)

〔方士が興し祀ったものは、それぞれの方士自らが司り、その人が死ねばやめ、祠
官はそれを司らなかつた〕

- b. 方士所興祠，各自主，其人終則已，祠官不主。(『史記』封禪書)

〔方士が興し祀ったものは、それぞれの方士自らが司り、その人が死ねばやめ、祠
官は司らなかつた〕

- (49) a. 公懼，止之，不止，出船，怒，歸蔡姬，弗絕。(『史記』齊太公世家)

〔桓公は恐れ、蔡姬を止めたが、蔡姬は止めず、公は船を出て、怒って、蔡姬を實家
に歸し、これと絶縁しようとした〕

- b. 桓公止之，不止，公怒，歸蔡女而不絕也。(『史記』管蔡世家)

〔桓公は蔡姬を止めたが、蔡姬は止めず、公は怒って蔡姬を實家に歸し、絶縁しよ
うとした〕

では、「不」と「弗」の機能はなぜ接近したのであろうか。魏培泉 2001：174 は、先秦中國語の
代名詞目的語「之」が時にゼロ代名詞(pro)と入れ替えられることができ^{*30}、このことが否定文中
で「弗」と「不」どちらを用いても意味が變わらない状況を形成したと指摘する。これは恐らく正
鵠を得た考えであらう。

しかも、ゼロ代名詞の擴張は「之」の衰退とも大きく關わる(魏培泉 2004：347-349)。前漢時
代、代名詞「之」はすでに衰微しつつある傾向にあり、朱冠明 2015：21 の統計によると、「之」の
使用回数と文獻の全字数の比率は先秦の『左傳』では 1.46%、『孟子』では 1.76%である一方、前
漢の『史記』では 1.17%であり、さらに東漢『支讖譯經』では 0.25%、南北朝『世說新語』では
0.77%である^{*31}。

*30 例えば、

予既烹而食之。(『孟子』萬章上篇)
〔私は(魚を)煮たあとそれを食べた〕

は動詞「烹」と「食」の目的語が同一のものであるが、前者はゼロ代名詞を採用し、後者は「之」を用いる。すな
わち「予既烹 の い 而食 之 い」という構造である。

*31 代名詞目的語「之」は先秦では、指示機能のほかに、述語を使動化する、または名詞を名詞述語化する
機能も持っていた(魏培泉 2004：349)。次注で觸れる非對格動詞(unaccusative verb)は目的語の有無が、文の
表す態(voice)に關與する。例えば非對格動詞「滅」は、「之」を目的語に取ると使役文となり、目的語を取らな
いと、被動文または自動詞文となる。

楚復伐鄧，滅之。(『左傳』莊公 6 年)
〔楚はまた鄧を討ち、これを滅ぼした〕

このほか、魏氏は指摘していないが、一部の動詞、例えば非能格動詞(unergative verb)^{*32}も「之」を用いてもゼロ代名詞を用いても、文意はほぼ変わらない。これも「弗」と「不」どちらを用いても良い状況を作り出し、2語の機能をより一層近づけたと考えられる。

同盟滅。(『左傳』文公4年)
〔同盟は滅ぼされた／滅んだ〕

後漢以降、「之」が衰退し、ゼロ代名詞に取って代わられると、「之」の有無と、文の表す態が対応しなくなる。例えば、『史記』と『漢書』は、同一事跡に対する敘述において、前者が「之」を用いているところで、後者はゼロ代名詞を用いる。

及魏其侯失勢，亦欲倚灌夫，引繩批根生平慕之後棄之者。(『史記』魏其武安侯列傳)
〔魏其侯は勢力を失うと、灌夫を頼りにし、これまで自分を慕っておきながら後になってこれ(自分)を捨てた者を排除しようとした〕
及竇嬰失勢，亦欲倚夫，引繩排根生平慕之後棄者。(『漢書』竇田灌韓傳)
〔竇嬰は勢力を失うと、灌夫を頼りにし、これまで自分を慕っておきながら後になって捨てた者を排除しようとした〕
斬首捕虜比三百石以上者皆殺之。(『史記』吳王濞列傳)
〔捕虜を斬首するに、比300石以上の者は、すべてこれを殺した〕
斬首捕虜比三百石以上者皆殺。(『漢書』荆燕吳傳)
〔捕虜を斬首するに、比300石以上の者は、すべて殺した〕

「之」が能動文か被動文かの分別のマーカートとならなくなったのは、別の被動マーカ―「見」、「被」が発達したためであるとされる(魏培泉 2004: 349)。

*32 近年、多くの論者が上古中国語の非對格動詞(unaccusative verb)と非能格動詞(unergative verb)に言及している。非對格動詞とは目的語の有無で主語の意味役割が変わるもので、目的語を取らないとき主語が被動作主(patient)或いは対象(theme)になり、目的語を取るとき主語が動作主(agent)又は使役者(causer)、目的語が被動作主又は被使役者(cause)になる動詞を指す。一方、非能格動詞は目的語を取るか否かに関わらず、主語の意味役割が変わらない動詞である。兩種の文型は以下のように圖式化できる。

非對格動詞：X + V + Y Y + V
非能格動詞：X + V + Y X + V

次の「斬」は非對格動詞であり、目的語を取らないとき、その主語は「斬られる方」で、「斬る方」ではない。一方、目的語を取るとき、主語は「斬る方」で、目的語は「斬られる方」である。例えば、

信方斬曰：“吾悔不用蒯通之計。”(『史記』淮陰公列傳)：Y + 斬 = Y が斬られる
〔韓信がまさに斬られようとしているとき言った、「私は蒯通の策を採用しなかったことを後悔している」と〕
大王斬臣以徇國。(『左傳』莊公九年)：X + 斬 + Y = X が Y を斬る
〔大王は臣下を斬り、國に従わせる〕

次の「追」は反對に非能格動詞であり、目的語の有無に拘わらず、主語は常に「追う方」を指す。例えば、

楚令尹子玉追秦師，弗及。(『左傳』僖公二十五年)：X + 追 + Y = X が Y を追う
〔楚の令尹子玉は秦軍を追うも、追いつかなかった〕
燕軍樂毅獨追，至于臨菑。(『史記』樂毅列傳)：X + 追 = X が追う
〔燕軍の樂毅は單獨で追ひ、臨菑についた〕

非對格動詞と非能格動詞の議論については、大西 2004、宋亞云 2014 を参照。

要するに、以上の代名詞目的語前置現象の減少、「之」の衰退及び「不」と「弗」のどちらを用いても良いという状況が、当時の人々の「弗」の語源に對する意識を失わせ、「弗」はもう「不+之」の合音とは意識されなくなり、その結果、單に「不」を強調しただけの強意型否定詞になったのである^{*33}。

後漢になると、「弗」は完全に「不」より語氣の重い否定詞と認識されている。例えば、

- (50) 弗者，不之深也。(『春秋公羊傳』桓公 10 年「秋，公會衛侯于桃丘，弗遇」何休注)
〔「弗」は「不」の深いものである〕

なぜ「弗」は「不之深」と認識されたのであろうか。「不」は中古音では三等韻、その上古音は短母音として復元されることもあれば(鄭張尚芳 2013: 173-174)、非咽頭化音として復元されることもあるが(Baxter & Sagart 2014: 68-76)、いずれにせよ、その發音は長母音や咽頭化音よりも弱いものであった。また、上古では現在一般的に平聲(すなわち開音節)として復元され、音節末の子音を持たない(Schuessler 2009 の復元音では*pa)。

さらに類型論の觀點から見ると、否定詞は弱化しやすい言語成分であり、發音は短く、獨立性も低い。中國語も例外ではなく、多くの方言では、否定詞の語音が弱化したため、接語として後續する語彙と合わさり、「不+X」という二音節語を形成する(嚴艷群 2015: 287)。例えば、普通話の“不免”(～せざるを得ない)、“不論”(たとえ～でも)、“不料”(意外にも)など。さらに、否定詞の弱化が進むと隣接する語彙と併合(fusion)し合音字を形成する。例えば北京方言の“不+用>甬”(～する必要がない)や、潮州方言の“唔 m³⁵ + 愛 ai²²³ > mǎi²²³(～してはいけない)”、“唔 m³⁵ + 解 oi³⁵ > moi³⁵(～のはずがない)など(嚴艷群 2015: 289-290)。

上中古の「不」もまた合音を引き起こした。例えば、「不+之>弗」や「不+可>叵」、「不+惟>非」など。「不」が合音字を形成するという言語現象は、「不」の語音がこの時すでに弱化していたことの裏返しである^{*34}。

一方「弗」は、「不」と同じ三等韻ではあるけれども、破裂音子音韻尾*-t を伴う(Schuessler 2009 の復元音では*pat)。では上古の平聲韻と入聲韻の音的特徴にはどのような違いがあるのであろうか。平山氏の上古聲調に関する一連の論考によれば^{*35}、平聲は無標(unmarked)な聲調で、上聲・去聲・入聲と異なり、喉頭の緊張を伴わない、特に造作のない音調であった。一方、入聲は韻尾に至って急激に發聲器官を閉じて氣流を狭め、聲を止める發聲であり、音節末の内破音子音は喉頭の緊張を伴うものである。入聲が緊張を伴った發聲である以上、入聲「弗」は平聲「不」より、大きな圧力と明確さを伴って調音され、聽覺印象も遙かに強かったはずである。つまり「弗」は音韻論・形態論レベルでは「不」よりも有標(marked)な語である。これが「弗者、不之深」、すなわち「弗」が「不」の強意型と認識された原因であろう。

以上のように、「不」と「弗」は前後漢を通して、文法機能に差がなくなるとともに、「弗」はその音韻論的特徴により「不+之」の合音から、「不」の強意型否定詞へと再分析(reanalysis)されてい

*33 大西 1988: 235 の調査によると、上古文獻の「弗」が自動詞や形容詞といった一項動詞を否定するケースは多くない。この言語事實は、上古において「弗」の語源意識は薄まりつつあるけれども、完全に消失するまでには至っていないことを示している。

*34 章也 1983: 23 は合音字を形成する 2 つの成分のうち韻母を落とす上字は單母音であると指摘する。

*35 平山 1986: 12、平山 1989: 12-13 及び平山 1991: 147。

ったのである。

これ以降、「弗」の使用頻度は減少の一途をたどる。魏培泉 2001:180-181 の調査によると、『新序』、『説苑』、『列女傳』、『鹽鐵論』、『法言』などの前後漢の間の傳世文獻では「弗」は極めて少ない。さらに『漢書』は總字數が『史記』より多いにも拘わらず、「弗」の出現數は『史記』よりはるかに少ない。魏培泉氏はこれに基づき、當時「弗」は書寫上すでに「不」に取って代わられたと見ている。

魏克彬 2019:149 は、「弗」消失の主要原因を否定文代名詞目的語の前置から後置への變化に求める。魏兆惠 2009:79 によると、後漢の「不」否定文の代名詞目的語後置の用例數は前置の用例數よりはるかに多く、前置と後置の比率は、『漢書』では 4:32、『論衡』では 1:32 である。魏兆惠 2009:80 はさらに、否定文中の代名詞目的語前置の狀況は後漢時代の口語では基本的に消失していたと斷言する。後漢の文人の先秦文獻に對する注釋は正にこの事實を證明している。例えば、

- (51) 則必不之賴。(『呂氏春秋』離俗覽)
[必ずそれを利があるものとは見なさない]
不賴之也。(高誘注)
[「不賴之」のことである]
- (52) 豈不爾思，子不我即。(『毛詩』鄭風・東門之墀)
[あなたを思わないことがないにもかかわらず、あなたは私のところに来てくれない]
我豈不思望女乎。女不就迎我而俱去耳。(鄭玄箋)
[私はどうしてあなたを思い慕わないことなどありません。あなたは私を迎えに来て、共に去ろうとはしない]

否定文の代名詞目的語が後置を主とする以上、後漢の人々はおよそ「弗＝不＋之」の合音原理を理解するのは難しかったはずである。従って、「弗」はこの時期に完全に「不」の強意型の否定詞になったと理解できる。何休の注「弗者，不之深也」は正にこれを反映しているのである。

6 「不」はなぜ「弗」の音を持つのかー「訓讀」と「イエスペルセンのサイクル」から

上段ですでに述べたように、「不」は本來、非入聲字(方久切、pjəu)であり、後のある時期に「弗」の音(分勿切、pjwət)を獲得した。では、「不」はいつ、そしてどのように入聲音を獲得したのであろうか。

これまでさほど意識されてこなかったが、「不」が「弗」と讀まれる現象は 2 つの側面から考える必要がある。ひとつは文字的側面、即ち「不」字が「弗」の字音を獲得したという文語レベルの現象である。今ひとつは語用論的側面、即ち普通否定詞が pjəu を用いなくなり、pjwət に變化したという口語レベルの現象である。

文字的側面について言えば、筆者は「不」が「弗」の字音で發音された原因の 1 つは、昭帝の避諱が結果として訓讀(または義同換讀とも稱される)の如き作用をもたらしたことによると考えている。

訓讀(義同換讀)は近年の古文字研究の進展により、注目を集めている文字現象である。それは、2つの文字の形や音が異っているが、それらの字義が接近していることによって、文献中互いに訓釋されたり置き換えられたりする現象を指す(鄭婁 2012)。早くは沈兼士〈吳著經籍舊音辨證發墨〉(1940年、沈兼士 1986所収)によって提示された。楊軍 2002: 49は、難讀字を常用字や読みやすい字に読み替える、あるいは常用字で讀音を注記する方法であると述べる。つまり訓讀(義同換讀)とは、ある文字(或いは語)の音を借りて、別の同義の字を読み解く行為である。本稿では劉新中 2007: 92によって、前者を「訓讀音」と、後者、すなわち読み替えられた文字を「被訓讀字」と稱す。訓讀が出現する原因の1つは一般的に、ある文字を、より馴染みのある同義語の語音に置き換えるためであると考えられるが、このほか、沈兼士 1986: 207は初期の漢字の形音義が十分に固定していないことが義同換讀を引き起こしたことを指摘する。

近年の楚簡の増加に従い、出土文字資料中の訓讀の有り様がより明らかになってきている。楚簡には訓讀現象が頻出しており、例えば被訓讀字「弁」字を訓讀音{草}^{*36}に読み、被訓讀字「坐」字を訓讀音{跪}に読み、被訓讀字「滄」字を訓讀音{寒}に読み、被訓讀字「視」字を訓讀音{見}に読み、被訓讀字「淵」字を訓讀音{深}に讀むといった例がある(大西 2010)^{*37}。俞紹宏、王姬璋 2017はさらに「身」字を{躬}に読み、「撞」字を{擊}に讀む例を挙げる。

訓讀は楚簡だけの現象ではない。裘錫圭氏によると、この種の用字現象は早くに現れ、且つ現在に至るまで長い期間にわたって見られるものだという。裘錫圭 1988: 219-222は以下の例を挙げ、訓讀(裘文では“同義換讀”と稱す)を證明している。

俛、頰換讀爲俯

《説文》訓“頰”爲“低頭”，以“俛”爲“頰”的異體。很多字書和古書注釋認爲當低頭講的“俛”和“頰”是“俯”的異體。... 其實“俛”跟“俯”原來是讀音截然不同的兩個字。... 只是由於“俛”跟“俯”同義，後來就被換讀爲“俯”了。... 至於“頰”字，《段注》據《玉篇》反切認爲本應與“俛”同音；黃生《字詁》“頰”字條則認爲“頰”、“俛”、“俯”三字原來都同義不同音，“頰”當音“眺”，“後人以其義同”，遂誤讀爲“俯”。

『説文』は「頰」を「低頭」と解釋し、「俛」を「頰」の異體字とする。多くの字書と古書の注釋は「低頭」という意味の「俛」と「頰」を「俯」の異體字と考える。... 實のところ「俛」と「俯」は音が明確に異なる2つの文字である。... ただ「俛」は「俯」と同義であることによって、後に「俯」に読み替えられた。... 「頰」字については、『段注』は『玉篇』の反切によって固より「俛」と同音であったと考える。黃生『字詁』は「頰」字の項において「頰」、「俛」、「俯」の3文字がもともと同義であるも同音ではなく、「頰」は「眺」と讀むべきで、「後人以其義同〔後世の人がその意味を同じと考えた〕」により、そのまま誤って「俯」と讀んでしまったのだと考える

圩換讀爲圍

大約從五代宋初或更早一些的時候開始，江淮一帶窪地往往在一大塊田地四周築堤防水，以利墾殖耕種。堤稱圩或圍，堤內之田稱圩田或圍田。“圩”本

*36 字と語の區別を明確にするため、本稿では裘錫圭 1988の方法を採用し、{ }で語(または形態素)を示す。

*37 大西氏はさらに訓讀こそが轉注の本質であると指摘する。

讀“于”，由於跟“圍”同義，後來常被換讀爲“圍”。在《新華字典》和《現代漢語詞典》里，“圩”字的這一意義只注 wéi 一音，本音 yú 似已淘汰。

〔およそ五代や宋代初期あるいはさらに早い時期から、江淮一帶の窪地はしばしば廣い田地の四方で堤防を築き水を防ぎ、開拓・耕作に役立てていた。堤防は「圩」或いは「圍」と稱され、堤防内の田地は「圩田」或いは「圍田」と呼ばれていた。「圩」は固より「于」と發音するが、「圍」と同義であることから、後に「圍」と讀み替えられた。『新華字典』と『現代漢語詞典』では、この意味での「圩」には wéi の音のみ示され、yú はすでに淘汰されたようである〕

石換讀爲擔



“石”可以當重量或容量的一種單位講，一百二十斤爲一石(《說文》作“秬”)，十斗也是一石。有很多地方把一石的重量或容量叫做一擔(《後漢書·宣秉》：“自無擔石之儲”，李賢注：“今江淮人謂一石爲一擔”。唐以後，謂一石爲一擔的，早已不限於江淮人了)。因此很多人把“石”用作當量詞講的“擔”的簡體。“石”讀爲“擔”的用法不見於《康熙字典》等較老的字書，現代的字典則都已收入。〔「石」は重量或いは容量の單位に相當し、百二十斤が一石に当たり(『說文』では「秬」に作る)、十斗も一石となる。多くの場所で一石の重量や容量を一擔と呼ぶ(『後漢書』宣秉列傳「自無擔石之儲〔自ずから一擔一石ほどの僅かの量の貯えもなくなった〕」。李賢注「今江淮人謂一石爲擔〔今江淮の人は一石を一擔と爲す〕」。唐以降、一石を一擔と言うのは、江淮人に限らなくなった)。従って多くの人は「石」を量詞を意味する「擔」の簡體として用いている。「石」を「擔」と讀む用法は『康熙字典』などの古い字書には見えないが、現代の字典類はいずれも収めている〕


腊換讀爲臘

古代把乾肉叫做“腊”，音同“昔”。後代稱一種腌肉爲“臘肉”，有的人就把“腊”當作“臘”的簡體用，簡體字採用了這個簡體。〔古代では干し肉を「腊」と言い、音は「昔」と同じである。後世、鹽漬け肉の一種を「臘肉」と稱し、ある者は「腊」を「臘」の簡體として用い、簡體字はこの簡體を採用した〕

このほか中國の通貨單位“元 yuán”(被訓讀字)を{塊 kuài} (訓讀音)と讀むのも訓讀である。訓讀は中國の諸方言中にも廣く見られ、例えば閩語潮陽方言では「～したい」を意味する“欲 iok¹”(被訓讀字)を{愛 ai¹} (訓讀音)で讀む(張盛裕 1984: 135)。

以上のように、訓讀とは意味の近接性を媒介とした字の讀み替え現象であるが、「不／弗」や「邦／國」など改字による避諱もまた同義の文字への讀み替えである。従って、兩者の用字運用は近いと言える。

そして訓讀は時に、被訓讀字の一字多音現象をもたらす。例えば、楚簡の「 (宋)」字と「

(困)」字はともに「淵」字の異體字であるが(『說文』は「淵」字古文を「」に作る)、これら「淵」字

は如字に {淵} に讀むほか、さらに {深} (訓讀音)にも讀み替えられる^{*38}(『廣雅』釋詁三「淵、深也」。すなわち楚系文字の「淵」字は 2 つの異なる字音を持っていたということである。また例えば、楚簡の「坐(坐)」字は {坐} にも、また {跪} (訓讀音)にも讀まれており^{*39}(『禮記』玉藻孔穎達疏「坐、跪也」。2 字はともに兩膝を地につける行爲を表す)、「坐(坐)」にも 2 つの異なった字音があると言える^{*40}。このほかまた、楚簡の「滄」字は {寒} (訓讀音)に讀み替えることができるが^{*41}(『説文』水部「滄、寒也」、その他の「倉」聲字は {倉} に讀まれているため^{*42}、「滄」を多音字と見なすこともできる。

鄭姪 2012: 49 によると、傳世文獻にも同種の現象があるという。例えば、「櫂」は本來齒音であるが(『玉篇』「又子絶切」、溪母(訓讀音)にも讀むのは(『玉篇』丘喬切)、「鞮」や「橋」と訓讀が生じたためである(いずれも泥の上を滑っていくための道具である)。また「貉」は本來幽部字であるはずだが(『廣韻』下各切。段玉裁は三部(幽部)に屬すると見なす)、「貉」(『廣韻』下各切)と意味が同じために混用されたことで、「貉」の音(訓讀音)を持つ。さらに楊軍 2002: 50 は『周禮』夏官篇・御僕「夾蜃」の『經典釋文』音注「辰軫反、劉薄忍反」を挙げつつ、「蜃」に「薄忍反」の音があるのは、「蜃」を同義の「蟻」(訓讀音)に讀み替えたためだと指摘する(『説文』蟲部「蚌、蜃屬」。『尚書』禹貢篇「淮夷蠙珠暨魚」の『經典釋文』「蠙字 ……、蚌也」。「蜃」、「蟻」、「蚌」はいずれも二枚貝を表す)。

*38 例えば、

顔困(淵)侍夫子。(上博楚簡『君子爲禮』3 號簡)

〔顔淵は先生のもとに付き従っていた〕

宥(深), 莫敢不宥(深)。淺, 莫敢不淺。(郭店楚簡『五行』46 號簡)

〔深ければ、自ら進んで深くすまいという者はいない。淺ければ、自ら進んで淺くすまいという者はいない〕

*39 例えば、

夫子曰：“逢(坐), 吾語汝。”(上博楚簡『君子爲禮』1 號簡)

〔先生は、「座れ、私はお前に告げよう」と言った〕

比較：「曰：“坐，我明語子。”」(『孟子』公孫丑下篇)

社稷以坐(跪=危)歟。(上博楚簡『東大王泊旱』18 號簡)

〔社稷は危うくなるであろう〕

なお陳劍 2005 は「坐」と「跪」は訓讀ではなく、「一語一形之分化」であるとするとするが、大西 2010 はこれを退ける。

*40 葉曉鋒 2014: 30-31 は「坐」字を「危」(*ŋor)を表す字と見なし、オーストロアジア祖語の「坐」(*ŋkol または *ŋol)を表すものと解釋する。もし葉説が成り立つなら、楚簡の「坐」字は 2 つの字音を持たないことになる。

*41 例えば、

王滄(寒=汗)至帶。(上博楚簡『東大王泊旱』1 號簡)

〔王の汗は帶に至った〕

「滄」字は「寒」音を持つため、{汗} に讀むことができる。しかし一部の論者は「滄」と「寒」は訓讀ではなく、形近による混用であると考え(馮勝君 2007: 110-114、單育辰 2014: 189-191)。

*42 例えば、

倉(蒼)顔是(氏)。(上海楚簡『容成氏』1 號簡)

このほか、上段で挙げた「俛」(本音：『廣韻』亡辨切、訓讀音：『集韻』匪父切)／「頰」(本音：『廣韻』他弔切、訓讀音：『廣韻』方矩切)／「俯」(本音：『廣韻』方矩切、訓讀音：『廣韻』「今音免」)、「冚」(本音：『字彙』雲俱切、訓讀音：『正字通』「俗讀若維」)、「石」(本音：『廣韻』常隻切、訓讀音：『新華字典』dàn)、及び「腊」(本音：『廣韻』思積切、訓讀音：『新華字典』là)なども訓讀を通して被訓讀字が非本音の字音を獲得している。

さらに避諱も讀音の混亂をもたらすことがある。「治」は『慧琳音義』では 2 つの字音が示されている。ひとつは澄母であり(卷 41 大乘理趣六波羅蜜多經卷第一「直之反。考聲：“治，理也”」、今ひとつは來母である(卷 47 中論序「離止反。孔注尚書云：“治，理也”」、卷 20 寶星陀羅尼經序「音理」)。10 世紀藏漢對音資料の敦煌遺書『千字文』(P3419)は「治」を li で轉寫する(高田 1988：248)。これらの音變化は唐の高宗(李治、649年-683年)の諱を避けて、「治」を「理」に改めた結果である^{*43}(尾崎 1987：47)。このほか、高田 2010：64-67 は敦煌寫本の中から「治」で li の音を表す用例を探し出し、この種の讀み替えは臨時的な措置ではなく、當時の社會において一定程度定着した字音であると指摘している。このような現象も改字による避諱と訓讀の用字運用が近いことを示している。

もし「不」と「弗」にも同種の讀み替え現象が生じたならば、昭帝劉弗陵の諱「弗」が避諱によって「不」に置き換えられたのち、多くの書面で{弗}を表すのに「不」字が用いられたため、2 つの否定詞は徐々に混用され、「不」は{弗}の字音(分勿切、pjwət)を獲得したと考えられる^{*44}。さらに上で述べたように、訓讀現象においてはしばしば被訓讀字が多音となるが、「不」と「弗」では、「不」が多音となっている。このことから、以下のような経緯を想定することができるかもしれない。すなわち、「弗」が避諱によって「不」に置き換えられたのち、當時の文人や役人は、書面語の「不」字の一部分が元來 {弗} を表していたと見なし、一部の「不」を {弗} に讀み、それによって「不」は {不} と {弗} の 2 語を表す状態となり、最後に「不」は{弗}の字音(分勿切、pjwət)を獲得した。

これは文字的側面における現象である。もし以上の觀點が成立しうるならば、「不」が「弗」の字音を獲得したのは、早ければ、「弗」が避諱によって「不」に置き換えられた前漢昭帝より後、概ね後漢以降であると考えることができる。

しかし、「不」が「弗」の字音を獲得した要因はこれだけではない。というのも、避諱だけが要因であるならば、他の多くの避諱も一字多音現象をもたらしたはずだからである(例えば、避諱字「國」が諱字「邦」の字音を獲得し、避諱字「通」が諱字「徹」の字音を獲得する、など)。しかし実際には、そのような例はほとんどない。筆者は「不」が「弗」の字音を獲得したのには、もう 1 つ別の

*43 「治」と「理」は同義語である。古注では常に互訓される。例えば、

治，理也。(『左傳』文公 6 年「治舊滄」杜預注)

理，治也。(『戰國策』秦策一「不可勝理」高誘注)

この角度から見れば、「治」を避けて「理」に改める避諱は同義による讀み替えである。ただし避諱字「不」が諱字「弗」の音を獲得したのとは反対に、諱字「治」が避諱字「理」の字音を獲得している。

*44 なお、大西 1988、魏培泉 2001、魏克彬 2019 らは、前漢昭帝の避諱が主に「弗」から「不」への文字表記の變化を促したと見なすのみで、それが「不」と「弗」に訓讀の如き作用をもたらし、「不」の音變化にも關与している可能性にまでは言及していない。また、Kennedy1964、Pulleyblank1995、辻 1997 も「不」の音變化の要因として「不」と「弗」の機能的接近を挙げるのみで、やはり訓讀には觸れていない。

要因があると考えている。それは語用論的要因である。

語用論的側面から見れば、否定形態素はメッセージの重要な部分を擔っているという点で、大きな傳達上の重みを持っており、聞き手が文中の否定の形態素を聞き損なったら、文を根本的に誤解することになる(Dryer 1988 : 102)^{*45}。

しかし、上ですでに論じたように、上古の非入聲の「不」の發音は相當に弱化していた。「不」は中古音では三等韻、その上古音は短母音として復元されることもあれば(鄭張尚芳 2013 : 173-174)、非咽頭化音として復元されることもあるが(Baxter & Sagart 2014 : 68-76)、短母音にせよ非咽頭化音によせ、その發音はいずれも長母音や咽頭化音よりも弱い(アラビア語では咽頭化音は強調輔音(emphatic consonants)の1種である。Baxter & Sagart 2014 : 69)。さらに「不」は、上古では平聲に該当し、現在一般的に開音節で復元される(Schuessler 2009 の復元音では*pa)。このほか「不」は合音字の上字となっていることから(「弗<不+之」や「叵<不+可」など)、その語音は相當に弱化していたと言える。語音の弱化は合音形成の条件の1つである。

Jespersen 1917 : 4-14によると、多くの言語の否定表現の歴史には、當初の否定副詞が弱まり、否定を表すのに不十分であると感じられるようになると、否定副詞が何らかの付加語によって音聲の量を増やして強化されるという變化プロセスが見られるという。例えば、ラテン語の否定詞 *ne* は發音が極めて弱いため、人々はそれに *oenum* (one thing の意思) という語を加えて意味を強化し、この新しい *non* (< *ne-oenum*) が徐々に普通否定詞となった。フランス語の *ne...pas* の *pas* (もとは「一步」の意味) も同種の否定強化の付加語である。これらは所謂「イエスペルセンのサイクル (Jespersen's cycle)」と呼ばれるもので、否定詞は弱化と強化という矛盾した變化を繰り返しているのである。

「不」も同種の變化過程を経たものであろう。まず上古の「不」が弱化し、否定を表すのに不十分であると感じた當時の人々はその否定意味を明確にするため、「不」を何らかの手段で強化した。「不」を「弗」音で發音することこそが、この強化手段に当たる^{*46}。上段で述べたように、入聲字「弗」は破裂音子音韻尾*-t を伴うもので(Schuessler 2009 の復元音では*pət)、平山氏の分析によれば、音節末の内破音子音に喉頭の緊張を伴っており、喉頭の緊張を伴わない無標(unmarked)の「不」に比べ聽覺印象が遙かに強く、また發聲に伴う努力も大きい。つまり「弗」は音韻論・形態論レベルでは「不」よりも有標(marked)な語であり、このため、早い段階で「不」の強意型として認識されていた。「弗」に對するこのような認識が、當時の人々をして普通否定詞を強化するために、付加語を新たに加えるのではなく、もとより「不」に比して音聲的に強い印象を與える「弗」を選ばせたのであろう^{*47}。そして時代が下るとともに、「弗」音は古代中國語口語の中で普通否定詞の地位を確立したのである。

しかし、このような音的強化は、「弗=不+之」であった段階では、生じ難かったであろう。とい

*45 Negative morphemes carry a large communicative load in the sense that they carry an important part of the message. If a hearer fails to hear the negative morpheme in a sentence, they will have fundamentally misunderstood the sentence. (Dryer 1988 : 102)

*46 魏克彬 2019 : 150 は「不之」の合音がまず「不」の強調語氣と見なされ、その後徐々に「不」そのものと交替したとしつつ、これが Jespersen's cycle が示す否定詞強化のプロセスと一致すると見なしている。

*47 上古中期の「弗」は「不之」の合音であった以上、それはもとより、否定の強化として作用する付加語に相當する成分を含んでいたとも言える。

うのも「不」音と「弗」音の差が明確な文法構造や文義の違いをもたらすためである。従って、「不」と「弗」の機能が接近して初めて、このような強化が生じたのであり、筆者は以上により「不」の発音が「弗」音(分勿切、pjwət)へと強化されたのは、およそ「弗」が完全に強調を表す否定詞に再分析された後漢以降であると考えている。

「不」が「弗」音を獲得したのは、以上の2つの側面—文字的側面と語用論的側面—における現象が複層的に折り重なった結果である。

7 おわりに

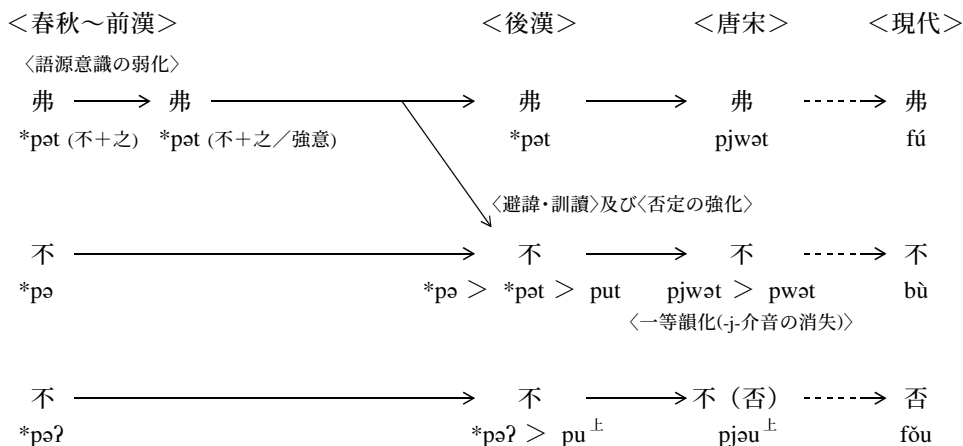
最も古い「不」に対する入聲音(分勿切)の音注は、『守温韻學殘卷』(唐末或いは公元 907-960年)と『廣韻』(1008年)であるが、潘悟雲 2002: 307 と梅祖麟 2013: 5 はこれによって「不」字の「分勿切」(入聲)は唐末五代になって出現したものであろうと推測する。しかし、唐末五代に出現したばかりの音變化がすぐに字書に採用されたとは考えにくい。例えば、上で述べた「蜃」字は南北朝時期にすでに「蟻」音(薄忍反)を持っていたが、この音は『廣韻』以前の切韻系韻書には採録されておらず、『集韻』(1039年)になってようやく採用された(婢忍切)。また例えば、「石」字は遅くとも唐代には「擔」と發音されていたと見られるが^{*48}、「石」字の「擔」音はその後長らく俗音と見なされていたようで^{*49}、『康熙字典』(1716年)には収録されていない。すなわち、例外音變が出現してから字書に正式に収録されるまでには長い時間が必要である。従って、入聲の「不」は唐末五代に突然現れたわけではなく、これより前に一部の方言或いは社會階層ですでに用いられていたのだと考えられる。事實、第1節で取り上げた『慧琳音義』が収める「髯」の反切「霏不」は、中唐期以前に「不」が「弗」の音を持っていたことを示唆する。

本稿上段で、後漢の「不」はすでに「弗」と發音する条件を備えていたと述べた。現在論據が不足しており、「不」が入聲音を獲得した具體時期を特定することはできないが、筆者はこの變化は後漢から唐の間のある時期に發生していたと考えている。

*48 “唐以後，謂一石爲一擔的，早已不限於江淮人了。”(裘錫圭 1988: 220)

*49 張自烈『正字通』午集下：“石與僮別。《刪通傳》·守僮石之祿·註·僮，小罍，受二斛’。《南史》·劉毅家無僮石之儲’，俗僞呼石爲僮”〔「石」と「僮」は異なる。『漢書』刪通傳「守僮石之祿(僮石の祿を守る)」の注「僮，小罍，受二斛(僮は小罍である、二斛を收容する)」、及び『南史』宋本紀上「劉毅家無僮石之儲(劉毅家に僮石の儲えはない)」など、俗に誤って「石」を「僮」と發音する〕、及び黃生『字詁』：“漢以石爲俸祿之等，故有二千石之稱。今俗用此爲僮都濫切俗作擔亦非字。至呼二千石亦如此音。此最鄙謬。”〔漢では「石」を俸祿の等級としており、それゆえ「二千石」といった稱謂があった。今俗にこれを用いて「僮」字(都濫切。俗に「擔」に作るが、誤りである)となす。二千石の發音についてもこの音と同じであるが、これは最も淺薄で誤った音である〕。なお、袁健惠 2013: 10 によると「擔」は「僮」の後起分化字である。

○“不” “弗”字音と機能の變化プロセス(復元音は Schuessler 2009 による)



附記：

本稿執筆に際し中央研究院魏培泉教授、東京大學小野秀樹教授、京都大學松江崇准教授、東京大學宮島和也助教より貴重な助言を賜った。この場を借りて深く御禮申し上げたい。

参考文献

日文

- 上田正 1984 『切韻逸文の研究』, 東京: 汲古書院, 1984年2月
- 大西克也 1988 「上古中國語の否定詞“弗”と“不”の使い分けについて」, 『日本中國學會報』第40集 : 232-246, 1988年
- 大西克也 2013 「秦の文字統一について」, 渡邊義浩編『中國新出資料學の展開』: 127-149, 東京: 汲古書院, 2013年8月
- 影山輝國 2003 「漢代避諱に關する若干の問題について」, 東京大學東洋文化研究所編『東洋文化研究所紀要』第144冊: 43-73, 2003年
- 河野六郎 1937/1979 「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」, 『河野六郎著作集2』: 3-154, 東京: 平凡社, 1979年11月
- 高田時雄 1988 『敦煌資料による中國語史の研究』, 東京: 創文社, 1988年2月
- 高田時雄 2010 「避諱と字音」, 『東方學報』第85冊: 694-702, 2010年
- 辻星兒 1997 「「不」の字音について: 中國・日本・朝鮮字音」, 『東洋學報』第79冊: 1-17, 1997年
- 平山久雄 1986 「上古漢語の聲調調値」, 『伊藤漱平教授退官記念中國學論集』: 1-24, 東京: 汲古書院, 1986年3月
- 平山久雄 1989 「高誘の『淮南子』『呂氏春秋』注に見える「急氣言」「緩氣言」について」, 『東方學』第78輯 : 41-54, 1989年

中文

- 陳劍 2005 〈上博竹書《昭王與龔之旌》和《東大王泊旱》讀後記〉, 簡帛研究網站,
<http://www.jianbo.org/admin3/2005/chenjian002.htm> (リンク切れ), 2005年2月15日
- 大西克也 2004 〈施受同辭芻議—《史記》中的「中性動詞」和「作格動詞」〉, 高島謙一、蔣紹愚編《Meaning and Form: Essays in Pre-modern Chinese Grammar (意義與形式-古代漢語語法論文集)》: 375-394, München: Lincom Europe, 2004年
- 大西克也 2006 《上博六《平王》兩篇故事中的幾個問題》, 復旦大學出土文獻與古文字研究中心,
<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/1133> (2021年1月30日閱覽), 2010年4月21日
- 丁聲樹 1935 〈釋否定詞‘弗’‘不’〉, 《慶祝蔡元培先生六十五歲論文集》: 965-996, 北平: 國立中央研究院歷史語言研究所, 1935年1月
- 馮勝君 2007 《郭店簡與上博簡對比研究》, 北京: 線裝書局, 2007年4月
- 高思曼(Robert H. Gassmann)、何樂士譯 1993 〈否定詞“弗”的句法〉, 《古漢語研究》1993年第4期: 1-9
- 何樂士 2004 《左傳虛詞研究(修訂本)》, 北京: 商務院書館, 2004年12月
- 何莫邪(Christoph Harbsmeier)、何樂士譯 1992 〈馬王堆漢墓《老子》抄本和《秦律》殘卷中的“弗”〉, 《古漢語研究》1992年第4期: 28-39
- 戸内俊介 2019 〈再議甲骨文中的否定詞“不”與“弗”的語義功能區別—兼論甲骨文的非賓格動詞〉, 《文字、文獻與文明—第七屆出土文獻青年學者論壇暨國際學術研討會》, 上海: 上海古籍出版, 2019年10月
- 黃景欣 1958 〈秦漢以前古漢語中的否定詞“弗”“不”研究〉, 《語言研究》1958年第3期: 1-23, 科學出版社
- 劉丹青 2005 〈漢語否定詞形態句法類型的方言比較〉, 《中國語學》第252號: 1-22, 2005年
- 劉新中 2007 〈漢語訓讀的性質、原因及其影響〉, 《語言教學與研究》2007年第2期: 91-96
- 呂叔湘 1941/1984 〈論母與勿〉, 呂叔湘《漢語語法論集(增訂本)》: 73-102, 北京: 商務院書館, 1984年4月
- 梅祖麟 2013 〈否定詞“不”“弗”在漢語方言里的分布及其演變〉, 《方言》2013年第1期: 1-10
- 平山久雄 1991 〈漢語聲調起源窺探〉, 《語言研究》1991年第1期(總第20期): 145-151
- 裘錫圭 1988 《文字學概要》, 商務印書館, 1988年
- 裘錫圭主編, 湖南省博物館、復旦大學出土文獻與古文字研究中心編 2014 《長沙馬王堆漢墓簡帛集成》, 北京: 中華書局, 2014年6月
- 單育辰 2011 〈佔畢隨錄之十五〉, 復旦大學出土文獻與古文字研究中心網站,
<http://www.gwz.fudan.edu.cn/Web/Show/1606> (2021年1月30日閱覽), 2011年7月22日
- 單育辰 2014 《楚地戰國簡帛與傳世文獻對讀之研究》, 北京: 中華書局, 2014年5月
- 申紅義 2015 〈否定副詞“弗”的主觀化語用特徵〉, 《新疆大學學報(哲學·人文社會科學版)》第43卷第4期: 127-132, 2015年
- 沈兼士 1986 《沈兼士學術論文集》, 北京: 中華書局, 1986年12月
- 松江崇 2010 《古漢語疑問賓語詞序變化機制研究》, 東京: 好文出版, 2010年2月
- 宋亞云 2014 《漢語作格動詞的歷史演變研究》, 北京: 北京大學出版社, 2014年2月
- 宋迎春 2006 〈阜陽漢簡發現、整理與研究綜述〉, 《阜陽師範學院學報(社會科學版)》2006年第1期: 59-61
- 唐蘭 1947/1968 〈王仁昫刊謬補缺切韻跋〉, 龍宇純《唐寫全本王仁昫刊謬補缺切韻校箋》, 香港: 香港中文大學, 1968年9月
- 尾崎雄二郎 1987 〈談“治”字之讀“理”〉, 香港中國語文學會編《王力先生紀念論文集(中文分冊)》: 47-50, 香港: 三聯書店香港分店, 1987年2月

- 魏克彬(Crispin Williams)2019〈從出土盟書中的有關資料看戰國時代“弗”字紀錄“不之”合音的現象〉,《中國語文》2019年第2期:131-154
- 魏培泉 2001 〈「弗」、「勿」拼合說新證〉,《中央研究院歷史語言研究所集刊》第72本第1分:121-215, 2001年
- 魏兆惠 2009 〈再論古漢語否定句代詞賓語前置問題〉,《語文學刊》2009年第1期:78-81
- 新華辭書社 1957 《新華字典》,上海:商務印書館,1957年6月
- 嚴艷群 2015 〈漢語否定詞弱化的跨方言考察〉,《語言研究集刊》第14輯:281-296,上海:上海辭書出版社,2015年
- 楊軍 2002 〈“義同換讀”的產生與消亡〉,浙江大學漢語史研究中心編《漢語史學報》第2輯:49-53,上海:上海教育出版社,2002年5月
- 葉曉鋒 2014 〈上古楚語中的南亞成分〉,《民族語文》2014年第3期:28-36
- 俞紹宏、王姬璋 2017 〈同義換讀及其複雜性初探-以楚簡文字為例〉,《中國語文》2017年第2期(總第377期):229-233
- 袁健惠 2013 〈釋“石”〉,《寧夏大學學報(人文社會科學版)》第35卷第2期:7-13,2013年
- 章也 1983 〈論古代漢語的合音詞〉,《語文學刊》1983年第1期:21-25
- 張盛裕 1984 〈潮陽方言的訓讀字〉,《方言》1984年第2期:135-145
- 張玉金 2012 〈從出土文獻看《老子》《論語》中被替換的“弗”〉,《文獻》2012年4月第2期:3-11
- 鄭妞 2012 〈“同義換讀”現象在上古音研究中的作用〉,《陝西理工學院學報(社會科學版)》第30卷第1期:48-53,2012年
- 鄭張尚芳 2013 《上古音系(第2版)》,上海:上海教育出版社,2013年12月
- 周法高 1953/1972 《中國古代語法 稱代編》,臺北:臺聯國風出版社,1972年3月
- 周光午 1959 〈先秦否定句代詞賓語位置問題〉,中國語文雜誌社編《語法論集(第3集)》:128-192,北京:商務印書館,1959年12月
- 周守晉 2005 《出土戰國文獻語法研究》,北京:北京大學出版社,2005年8月
- 朱冠明 2015 《先秦至中古漢語語法演變研究》,北京:中國社會科學出版社,2015年6月

英文

- Aldridge, Edith. 2010. Clitic climbing in Archaic Chinese: Evidence for the movement analysis of control. <http://faculty.washington.edu/aldr/pdf/Control.pdf> (2021年1月30日閱覽), 2010
- Baxter, William H & Sagart, Laurent. 2014. *Old Chinese: A New Reconstruction*. New York: Oxford University Press, 2014
- Boodberg, Peter A. 1934/1979. Note on morphology and syntax I. The final -t of 弗. *Selected Works of Peter A. Boodberg*: 430-435, Berkeley: University of California Press, 1979
- Dryer, Matthew S. 1988. Universals of negative position. Michael Hammond, Edith A. Moravcsik & Jessica Wirth (ed.), *Studies in Syntactic Typology*: 93-124, Amsterdam: John Benjamins, 1988
- Graham, A. C. 1952. A probable fusion-word: 勿 wuh = 毋 wu + 之 jy, *Bulletin of the School of Orient and African Studies XIV Part I*: 139-148, 1952
- Kennedy, George A. 1964. Negatives in Classical Chinese, Tien-yi Li (ed.), *Selected Works of George A. Kennedy*: 119-134, New Haven: Far Eastern Publications, Yale University, 1964
- Pulleyblank, Edwin G. 1995. *Outline of Classical Chinese Grammar*. Vancouver: UBC Press, 1995

- Schuessler, Axel. 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese : A Companion to Grammata Serica Recensa*. Honolulu : University of Hawai'i Press, 2009
- Jespersen, Otto. 1917. *Negation in English and Other Languages*. København : Bianco Lunos, 1917

引書目錄

出土文獻

- 侯馬盟書：張頤、陶正剛、張守中著；高智審訂；山西省文物工作委員會編 《侯馬盟書》，太原：三晉出版社，2016年11月
- 包山楚簡：湖北省荊沙鐵路考古隊編 《包山楚簡》，北京：文物出版社，1991年10月
- 郭店楚簡：荊門市博物館編 《郭店楚墓竹簡》，北京：文物出版社，1998年5月
- 上博楚簡：馬承源主編 《上海博物館藏戰國楚竹書》(一)~(九)，上海：上海古籍出版社，2001~2012年
- 新蔡楚簡：河南省文物考古研究所編 《新蔡葛陵楚墓》，鄭州：大象出版社，2003年10月
- 睡虎地秦簡：睡虎地秦墓竹簡整理小組編 《睡虎地秦墓竹簡》，北京：文物出版社，1990年9月
- 嶽麓秦簡：朱漢民、陳松長主編 《嶽麓書院藏秦簡》(壹)~(伍)，上海：上海辭書出版社，2010~2017年
- 馬王堆帛書：湖南省博物館編 《長沙馬王堆漢墓簡帛集成》，北京：中華書局，2014年6月
- 北大漢簡：北京大學出土文獻研究所編 《北京大學藏西漢竹書(貳)》，上海：上海古籍出版社，2012年12月
- 定州漢簡：河北省文物研究所定州漢墓竹簡整理小組 《定州漢墓竹簡〈論語〉》，北京：文物出版社，1997年7月
- 王一、王二、王三、切三：劉復編 《十韻彙編》，臺灣：臺灣學生書局，1968年
- 守溫韻學殘卷：周祖謨編 《唐五代韻書集存》，北京：中華書局，1983年7月

傳世文獻

- 尚書：十三經注疏整理委員會整理 《十三經注疏整理本 尚書正義》，北京：北京大學出版社，2000年12月
- 左傳：楊伯峻編 《春秋左傳注(修訂本)》，北京：中華書局，1990年5月
- 禮記：十三經注疏整理委員會整理 《十三經注疏整理本 論語注疏》，北京：北京大學出版社，2000年12月
- 孟子：十三經注疏整理委員會整理 《十三經注疏整理本 孟子注疏》，北京：北京大學出版社，2000年12月
- 論語：十三經注疏整理委員會整理 《十三經注疏整理本 論語注疏》，北京：北京大學出版社，2000年12月
- 老子(王弼本)：島邦男 《老子校正》，東京：汲古書院，1973年10月
- 呂氏春秋：陳奇猷校釋 《呂氏春秋校釋》，上海：學林出版社，1984年4月
- 戰國策：《戰國策》，上海：上海古籍出版社，1978年5月
- 淮南子：何寧撰 《淮南子集釋》，北京：中華書局，1998年10月
- 史記：《史記》，標點本二十四史，北京：中華書局，1997年11月
- 漢書：《漢書》，標點本二十四史，北京：中華書局，1997年11月
- 一切經音義(慧琳音義)：徐時儀校注 《一切經音義三種校本合刊》上海：上海古籍出版社，2008年12月
- 龍龕手鑑：藤本幸夫 《龍龕手鏡(鑑)研究》，高麗刊本《龍龕手鏡》影印(卷1、卷3、卷4)，千葉：麗澤大學出版社，2015年10月
- 廣韻：周祖謨 《廣韻校本 附校勘記》，北京：中華書局，1960年10月
- 集韻：《集韻》，述古堂影宋鈔本影印，上海：上海古籍出版社，1985年5月
- 字彙：《字彙、字彙補》，清康熙27年靈隱寺刻本影印，上海：上海辭書出版，1991年6月

正字通：《正字通》，清康熙 10 年張氏弘文書院刊本影印，東京：東豐書店，1996 年 4 月
字詁：《叢書集成初編 問奇集、字詁》，指海本影印，北京：中華書局，1991 年
康熙字典：《康熙字典》，北京：中華書局，1958 年 1 月

